

# 元袋遺跡

- 第6次発掘調査報告書 -

元  
袋  
遺  
跡

- 第6次発掘調査報告書 -

二〇〇九年三月

仙台市教育委員会

2009年3月

仙台市教育委員会

もと  
元 袋 遺 跡

- 第6次発掘調査報告書 -

2009年3月

仙台市教育委員会

## 序　文

日頃、仙台市の文化財保護行政に対しまして、多大なご理解とご協力をいただき、心から感謝しております。

本書に収めた元袋遺跡は、仙台市太白区南部に所在する遺跡です。元袋遺跡周辺は、大野田遺跡や大野田古墳群、六反田遺跡など数多くの遺跡が分布する地域です。一方で、これらの遺跡が分布する地下鉄南北線の富沢駅周辺では、総合的な街づくりを目的に、区画整備事業が推進されており、急速にその姿を変えようとしております。

今回の発掘調査は、この区画整理事業地内のマンション建設に伴うもので、事前に教育委員会と事業主との間で保存協議を重ねましたが、残念ながら記録保存という結果となりました。今回の調査では、多くの調査成果が得られました。今後、教育委員会ではこれら資料を有効に利活用し、当地域及び仙台市民を含めた多くの方々に、この調査成果を享受して頂けますよう努力して参ります。

最後になりましたが、発掘調査並びに本報告書の作成にご指導、ご協力いただきました多くの皆様や関係機関各位に心より感謝を申し上げる次第です。

平成21年3月

仙台市教育委員会

教育長　荒井　崇

## 例　　言

1. 本書は、仙台市太白区大野田字元袋17に所在する「元袋遺跡」の第6次発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、仙台市教育委員会の指導のもと、株式会社イビソクが行った。
3. 本書の作成は、仙台市教育委員会の指導のもと、株式会社イビソクが行った。
4. 本書の執筆は、I.2を平間亮輔が、I.1・II・III・IV・VIIは服部英世が、VIは伊藤真史と服部英世が、VI.1・藤根久が、VI.2、パレオ・ラボAMS年代測定グループが行なった。編集は平間亮輔と服部英世が行なった。
5. 自然科学分析や鑑定については、株式会社パレオ・ラボが行った。
6. 遺物写真的撮影は、寿福写房が行った。
7. 出土した鉄製品の保存処理は、奈良大学に依頼した。
8. 発掘調査の記録、資料及び出土遺物は仙台市教育委員会が保管している。

## 凡　　例

1. 本書の土色については「新版標準土色帖」(小山・竹原:1997)を使用した。
2. 本書の「遺跡位置図」は宮城県遺跡地図を参考し、国土地理院発行の1/25,000を使用した。
3. 本書及び図版で使用した方位の北は、座標北を基準としている。
4. 座標値は、日本測地系X系のものである。
5. 図版中の標高は海拔標高を示している。
6. 遺構図の縮尺について、全体図は1/100と1/300、個別遺構図は1/60を基本として作成したが、遺構の規模や特徴などに応じて、適宜変更した場合がある。
7. 層位名は基本層をローマ数字、遺構については算用数字を使用している。
8. 本書の検出遺構の表記については次の略号を使用し、原則として検出順に番号を付した。

なお、掘削後に遺構ではないと判断したものがあるため、欠番がある。

SA=槽・解溝 SB=掘立柱建物跡 SD=溝跡 SI=堅穴住居跡 SK=土坑 SX=性格不明遺構 P=ピット

9. 本書の出土遺物の分類と登録には、次の略記号を使用し、分類ごとに登録番号を付した。

A=縄文土器 C=土師器(非口クロ) D=土師器(口クロ) E=須恵器

L=木製品類 N=金属製品 O=自然遺物 P=土製品

10. 土師器の実測図で内面の一部のスクリーントーンは黒色処理を表している。

11. 遺物観察表中の法量の欄に丸括弧書きで示した数値は、復元径である。

12. 遺物観察表中の法量の欄に山括弧書きで示した数値は、残存高である。

## 目 次

### 序 文

### 例 言

### 凡 例

I.はじめに.....	1
1. 調査要項.....	1
2. 調査に至る経緯.....	1

II. 遺跡の立地と環境.....	2
1. 地理的環境.....	2
2. 歴史的環境.....	2

III. 調査の方法と経過.....	4
1. 調査の方法.....	4
2. 調査経過.....	4

IV. 基本層序.....	4
---------------	---

V. 検出遺構と出土遺物.....	9
1. 整穴住居跡.....	9
2. 掘立柱建物跡.....	12
3. 清跡.....	15
4. 土坑.....	20
5. ピット.....	25
6. 性格不明遺構.....	26
7. その他の出土遺物.....	26

VI. 自然科学分析.....	27
1. 柱材の樹種同定.....	29
2. 柱材の放射性炭素年代測定.....	29

VII. まとめ.....	32
---------------	----

### 参考文献

## 写真図版 目次

写真図版1 空中写真.....	37	写真図版8 SB338掘立柱建物跡・土坑・ピット.....	44
1 調査区周辺空中写真（昭和31年撮影）		29 P279 遺物出土状況（南から）	
2 調査区周辺空中写真（平成18年撮影）		30 SK291 土層断面（南から）	
写真図版2 調査区完掘状況.....	38	31 SB338 完掘状況（東から）	
3 調査区V層上面 全景（東から）		32 SB338-P6柱根 出土状況（東から）	
4 調査区V層上面 東部～中央（北から）		33 SB338-P5柱根 出土状況（東から）	
写真図版3 P254ピット.....	39	写真図版9 SB339掘立柱建物跡.....	45
5 P254 遺物出土状況（北から）		34 SB339 南側柱穴列 完掘状況（北から）	
6 P254 完掘状況（北から）		35 SB339 北側柱穴列 完掘状況（北から）	
写真図版4 SI242堅穴住居跡.....	40	写真図版10 基本土層・下層確認トレチ等.....	46
7 SI242 全景（南から）		36 SB339-P4 土層断面（北から）	
8 SI242 遺物出土状況（南から）		37 SB339-P9 土層断面（南から）	
9 SI242カマド 模出状況（南から）		38 7グリッド北部遺構 完掘状況（南から）	
10 SI242 土層断面（北西から）		39 調査区北壁（南から）	
11 SI242-P1 土層断面（西から）		40 調査区東壁（西から）	
写真図版5 SI245堅穴住居跡.....	41	41 下層確認1トレチ 全景（南から）	
12 SI245 完掘状況（東から）		42 下層確認2トレチ 全景（南から）	
13 SI245 掘り方 全景（南から）		43 下層確認3トレチ 全景（北から）	
14 SI245 土層断面（西から）		写真図版11 出土遺物1.....	47
15 SI245 土層断面（北から）		写真図版12 出土遺物2.....	48
16 SI245-P1 遺物出土状況（南から）		写真図版13 出土遺物3.....	49
写真図版6 溝跡.....	42		
17 SD206 完掘状況（南から）			
18 SD246 完掘状況（北から）			
19 SD2・SD28 完掘状況（南西から）			
20 SD12 完掘状況（東から）			
写真図版7 土坑.....	43		
21 SK13 遺物出土状況（東から）			
22 P16・SX17 検出状況（南から）			
23 SK82 完掘状況（東から）			
24 SK83・SK89 完掘状況（北から）			
25 SK231 完掘状況（北から）			
26 SK240 完掘状況（東から）			
27 SK278 完掘状況（東から）			
28 SK289 完掘状況（西から）			

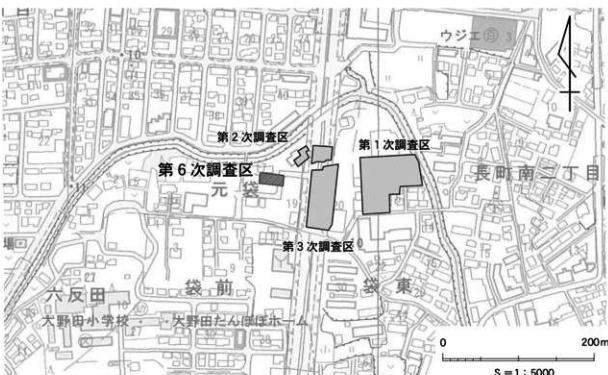
## I. はじめに

### 1. 調査要項

遺 蹤 名	元袋遺跡（宮城県登録番号01179、仙台市登録番号C-266）
所 在 地	仙台市太白区大野田字元袋17
調査目的	共同住宅建設に伴う事前調査
調査主体	仙台市教育委員会
調査担当	仙台市教育委員会文化財課調査係 平間亮輔 株式会社イビソク 調査員 服部英世 調査補助員 星野綾大 計測員 伊藤真史
調査期間	平成20年8月18日～平成20年10月16日
調査対象面積	340m <sup>2</sup>
調査面積	340m <sup>2</sup>

### 2. 調査に至る経緯

今次調査は共同住宅新築工事に伴うものである。予定地は元袋遺跡の範囲内に位置し、建物の構造から遺構に影響を及ぼすことが予想された。このため、仙台市教育委員会は地権者と協議したが、遺構への影響が回避できない工法であったため、まず遺構の状況を把握するための確認調査を6月16日～17日に行なった。その結果、遺構の存在が確認できたため再度協議を持ったが、最終的に記録保存を図るために発掘調査を平成20年8月～10月にかけて実施することになった。



第1図 調査区位置図

## II. 遺跡の立地と環境

### 1. 地理的環境

元袋遺跡は、仙台市南部の太白区大野田に所存する。当地は宮城野海岸平野の中央部、名取川と広瀬川の合流部付近の郡山低地に位置する。郡山低地の南部には、太白山に源を発する笊川が、郡山低地の南部の大野田地区と富沢地区の間を流れている。笊川は河川改修以前に氾濫を繰り返して、流路を変えてきたことが知られている。

調査区は、笊川が北東から南東へ流れを変える地点の南西部にあたり、笊川によって形成された自然堤防上にある。遺跡の範囲は22,000m<sup>2</sup>に及ぶと推定されている。

元袋の地名については、笊川によって区切られた袋状の地形が「袋」の由来とされており、周辺には「袋東」や「袋前」といった地名もある。

### 2. 歴史的環境

元袋遺跡(1)では、5次にわたる発掘調査が行われ、弥生時代の水田跡、奈良・平安時代の堅穴住居跡や溝跡、中・近世の屋敷跡や堀跡・井戸跡などが確認されている。

元袋道路周辺の名取川の下流域には、多くの遺跡が分布している。旧石器時代の遺跡は、元袋遺跡の北西に広がっている富沢遺跡(2)が挙げられる。後期旧石器時代の森林跡や生活跡が発見された。倒木群のなかに焚き火の跡と考えられる炭化物の集中箇所があり、周囲からは旧石器が発見された。縄文時代の遺跡は六反田遺跡(3)や大野田遺跡(4)が挙げられる。六反田遺跡では、縄文時代中期から後期にかけての住居跡が発見されている。堅穴住居が自然堤防の高まりに沿って造られ、その周辺では配石構造、埋設土器などの存在が確認された。大野田遺跡では、縄文時代後期前半の環状集石群や配石構造、掘立柱建物跡が発見され、骨角器や土偶、石刀等が出土している。墓域と祭祀の場が一体となった場所と考えられている。弥生時代の遺構については、先述した富沢遺跡(2)で弥生時代の水田跡が確認され、長町東遺跡(5)では複数の土器棺墓が発見された。

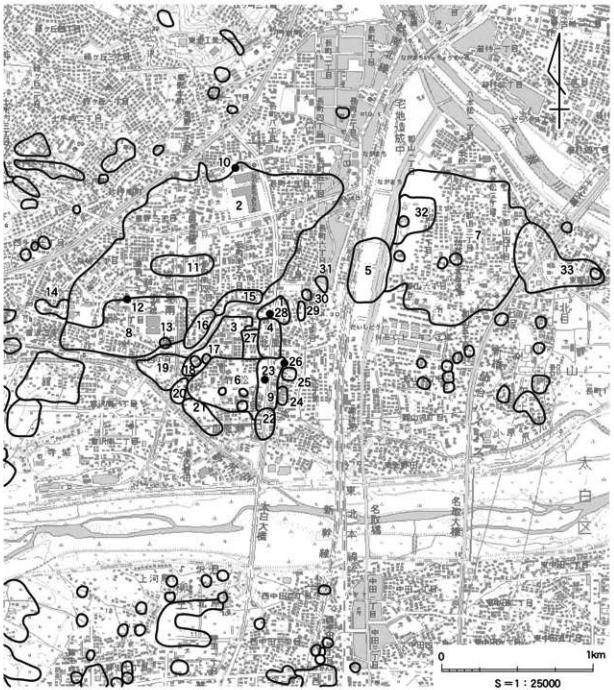
古墳時代の遺跡は大野田古墳群(6)が挙げられる。元袋遺跡の南西にあり、古墳時代中期後半から後期にかけて造営されたと考えられている古墳が約40基確認された。1基は前方後円墳で他は円墳である。墳丘が削平され周溝のみが残っていたものが多い。

飛鳥・奈良時代の遺跡は、長町駅東遺跡(5)が挙げられる。堅穴住居跡や掘立柱建物跡が約200棟発見され、大規模な集落跡だったことが確認された。その東方には、多賀城創建以前の陵奥国府と考えられている郡山遺跡(7)がある。元袋遺跡の第1次調査では、奈良・平安時代の堅穴住居跡などが確認された。銚具や平瓦が出土したことから、郡山遺跡 II 期官衙との関連が示唆されている。

平安時代の遺跡は山口遺跡(8)や富沢遺跡(2)が挙げられる。堅穴住居跡や水田が確認された。住居跡は自然堤防上にあり、水田は後背湿地に造られていた。水田は真北方向を基準とする条里型土地割にもとづいて造られたと考えられている。

鎌倉・室町時代の遺跡は王ノ塙遺跡(9)が挙げられる。鎌倉・室町時代の武士の屋敷跡と道路跡が発見された。屋敷内では、掘立柱建物跡や井戸跡などが見つかっている。

なお、元袋遺跡の第3次調査では堀で開まれた近世の屋敷跡が確認された。金箔瓦や伊達家の家紋入りの瓦や漆器も出土したことなどから、伊達家との関連が指摘されている。



- (1)元袋遺跡
- (2)富沢遺跡
- (3)六反田遺跡
- (4)大野田遺跡
- (5)長町駅東遺跡
- (6)大野田古墳群
- (7)郡山遺跡
- (8)山口遺跡
- (9)王ノ塙遺跡
- (10)金岡八幡古墳
- (11)泉崎浦遺跡
- (12)教塚古墳
- (13)富沢四丁目板碑群
- (14)富沢清水道遺跡
- (15)袋東遺跡
- (16)下ノ内浦遺跡
- (17)五反田古墳
- (18)五反田石棺墓
- (19)下ノ内遺跡
- (20)伊古田B遺跡
- (21)皿屋敷遺跡
- (22)王ノ塙古墳板碑群
- (23)長町清水道遺跡
- (24)北屋敷遺跡
- (25)北屋敷板碑
- (26)袋前遺跡
- (27)元袋古碑群
- (28)新田遺跡
- (29)長町南遺跡
- (30)長町六丁目遺跡
- (31)西台畠遺跡
- (32)北目城跡

第2図 周辺の遺跡

### III. 調査の方法と経過

#### 1. 調査の方法

試掘調査の結果をもとに後述するI～Ⅲ層を重機で掘削した後、遺構検出の作業を行った。なお、試掘調査区は幅3m長さ12mで、今回調査区の東西両端と中央部に位置する。試掘調査時の遺構検出面は、本調査のV層にある。

グリッドは、以前の調査成果とあわせるため、今回の調査でも日本測地系X系を用いて設定した。グリッドの間隔は5mで、座標軸を基準にして、南北方向をアルファベット、東西方向をアラビア数字で表した。北と西から記号を順に付し、グリッド北西隅の記号の組み合わせをグリッド名とした。

調査区内で、面的な広がりが確認できたのはV層である。周辺調査の成果から遺構の存在が予想されていたⅢ層より上の層は、天地返し等で搅乱されており確認できなかった。IV層は部分的に調査区北東部に残されていたに留まる。IV層上面を精査したが遺構は検出できなかったため、セクションベルトを残して掘削したところ、ベルトの土層断面の観察によってIV層上面から掘り込んでいた遺構を確認した。

V層は水はけが良くない土質だったため、調査区の壁面に沿って排水溝を設けた。その際、基本土層の把握も同時に行った。北壁と東壁際の排水溝は、全景写真撮影後に幅を広げるとともに、さらに掘り下げて、基本層序の記録作業を行なった。

また同時に下層確認を行なった。5m×2.5mのトレーナーを調査区に3箇所設定し、掘削深度は、排水溝掘削時に鍬丈式器を確認した検出面から0.4m下の標高8.6mを自安に、V層の途中まで掘削した。

記録写真的撮影には、35mm判のモノクロネガ及びカラーリバーサルフィルムと、デジタルカメラを使用した。なお、調査区全景の撮影には高所作業車を用いて行なった。

#### 2. 調査経過

第6次調査の表土掘削は平成20年8月18日から開始し、20日に終了した。8月22日からは調査区の壁面整形及び排水溝掘削、グリッド設定を行った。8月27日から、部分的に残るIV層とV層について同時に遺構検出を始め、9月5日に遺構検出状況の写真撮影を行った。同日の撮影終了後よりV層の遺構精査を開始した。遺構の精査は調査区東部のピット群から開始し、徐々に西部の遺構に着手していく。

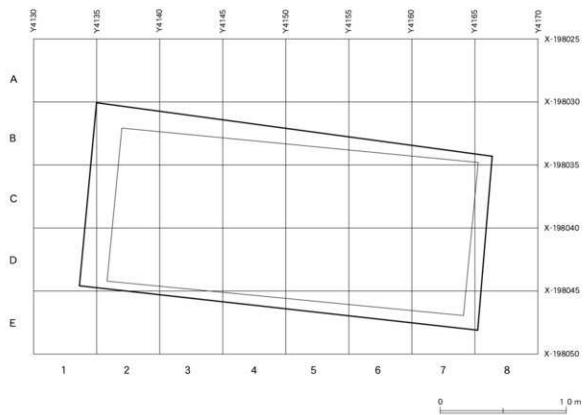
10月2日に遺構掘削後の写真撮影及び記録作業を行なった後、下層確認用のトレーナーを設定した。下層確認調査は10月7日から開始し、10月14日に終了した。平成20年10月16日に現地調査を終了した。

### IV. 基本層序

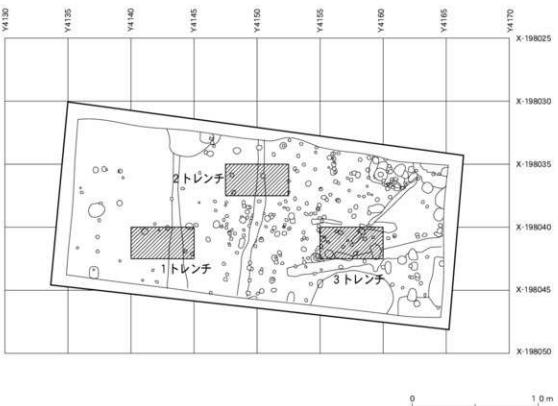
I層（造成土） I層に細分できる。Ia層はにぶい黄褐色の粗砂である。粘性はなく、締まっている。こぶし大の礫を多量に含む。厚さは、西部で90cm、東部30cmである。Ib層は灰黄褐色の粗砂で、直径5cmほどの礫を多量に含む。厚さは、北部で80cm、南部では50cmである。

II層（耕作土） II層は灰黄褐色の砂質シルトである。粘性はないが、締まりはややある。中央より東では、黄橙色の粗砂との混土層となる。厚さは、西部で30cm、東部では80cmで、調査区東端から10mほどの地点で大きく変化する。

III層（天地返しの土） 4層に細分できる。IIIa層はにぶい黄褐色砂質シルトである。粘性がややあるが、締りは



第3図 グリッド設定図



第4図 下層確認トレント配置図

ない。灰黄褐色のシルトブロックをまばらに含む。厚さは、20cm～60cmである。**Ⅲb層**はにぶい黄褐色砂質シルトである。粘性はなく、縮まっている。炭化物をごく微量含んでいる。厚さは10cm～20cmで、北壁の西部で確認した。**Ⅲc層**は灰黄褐色砂質シルトである。粘性はややあるが、縮まりはない。黄褐色シルトブロックや土器片などを含んでいる。厚さは30cmで、北壁の西部で確認できた。**Ⅲd層**は灰黄褐色砂質シルトである。粘性、縮まりともにややある。にぶい黄褐色シルトブロックを多量含んでいる。厚さは20cmで、東壁で確認できた。

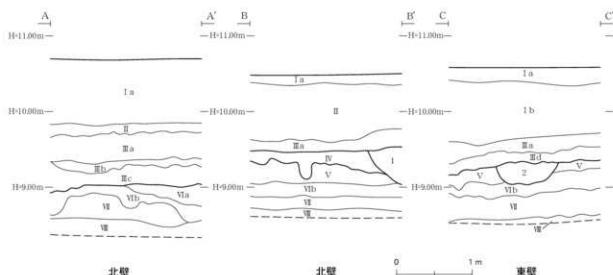
**IV層（遺構検出面）** 黒褐色砂質シルトである。やや粘性があり、やや縮まっている。灰黄褐色シルトブロック、焼土粒や炭化物を少量含む。厚さは15cmである。調査区の北東部にあたる、7Cグリッド杭付近で、**Ⅲ層**と**V層**の間にすることが確認できた。**IV層**は部分的にしか確認できなかったことから、造成や耕作などにより搅乱されたと考えられる。一部の遺構の検出面となっている。

**V層（遺構検出面）** にぶい黄褐色砂質シルトである。やや粘性があり、やや縮まっている。灰色のシルトブロックを少量含む。厚さは15cm～35cmで、西部は薄い。主にこの層の上面で遺構を検出した。試掘結果では、第4層と報告されている層である。大部分の遺構の検出面となっている。

**VI層** 2層に細分できる。**VIa層**は灰黄褐色シルト質細砂である。粘性はなく、やや縮まっている。厚さは20cmで、北壁の西部で確認できた。**VIb層**は、灰黄褐色砂質シルトである。やや粘性があり、縮まっている。東壁付近では、グラナイト化し、やや明るい色調に変化する。厚さは15cmである。

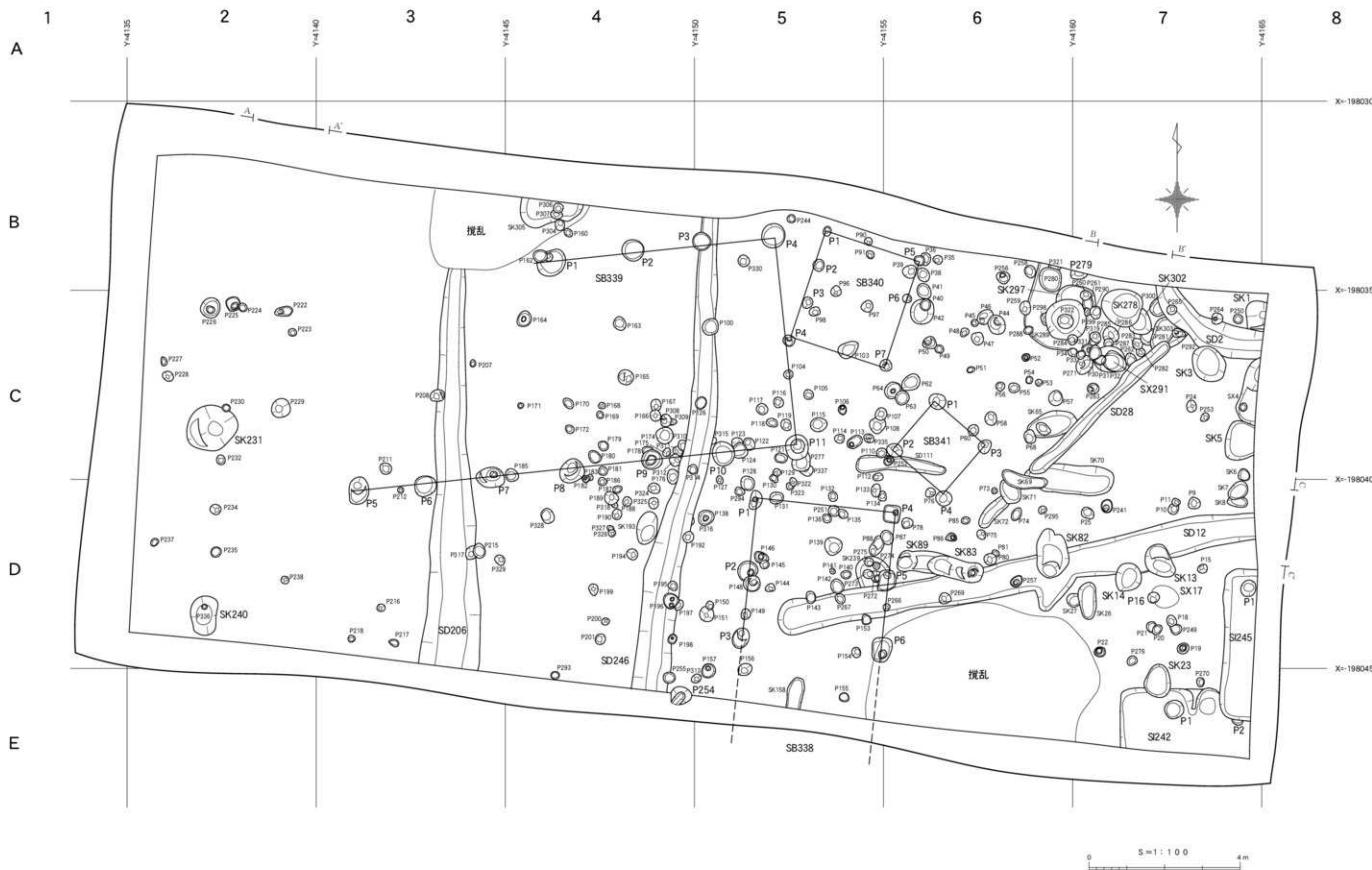
**VII層** にぶい黄橙色粘質シルトである。粘性がややあり、やや縮まっている。灰色シルトブロックを少量、褐色粒子を多量に含む。厚さは20cm～40cmで、東部は薄い。

**VIII層** にぶい黄褐色シルト質粘土である。粘性がややあり、やや縮まっている。**VII層**より粒子が細かい。



層位	土 色	土 性	しまり	粘性	備 考
1	10YR2/3 黒褐色	砂質シルト	ややあり	ややあり	SD2 塗土
2	10YR2/3 黒褐色	砂質シルト	ややあり	ややあり	黄褐色シルトブロックを少量含む SD12 塗土

第5図 調査区基本土層



第6図 遺構全体図

## V. 検出遺構と出土遺物

遺構検出面はIV層中ほどとV層上面である。地表面から遺構検出面までの深さは、1.4～1.9m、IV層上面の標高は9.6m、V層上面の標高は8.9m～9.4mである。

検出できた遺構は、IV層中ほどでは溝1条、土坑1基、ピット11基である。V層上面では、溝跡4条、竪穴住居跡2軒、掘立柱建物跡4棟、土坑29基、ピット269基、性格不明遺構4基である。

出土した遺物はテンバコ8箱である。

### 1. 竪穴住居跡

#### ・SI242竪穴住居跡

遺構の確認：7 E グリッドのV層上面で確認した。北東部をSI245に切られている。

平面形・規模：方形と考えられる。残存長は東西3.45m、南北1.7mである。検出面から床面までの深さは45cmである。

方向：西壁を基準とした建物方向はN-1°-Eである。

堆積土：3層確認し、自然堆積層と考えられる。

壁：床面からほぼ垂直に立ち上がる。

床面：掘り方埋土の上面を床面としている。

周溝：確認できなかった。

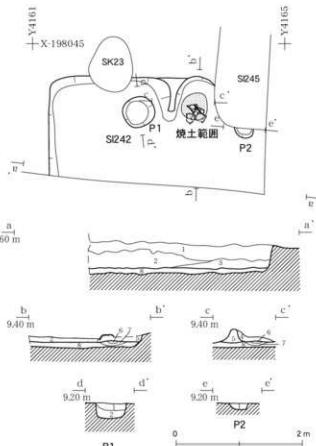
柱穴：確認できなかった。

カマド：カマドは住居跡北側で確認した。右袖はSI245

によって切られていたが、左袖と燃焼部が残っていた。

燃焼部の袖には差異が見られ、中央部の6層より辺縁部の7層のほうが被熱は顕著で、硬く焼け結まっていた。  
なお、支柱の痕は確認できなかった。

カマド燃焼部の上方、天井崩落土中からは土師器甕C-6が出土した。土師器甕C-6は2次焼成による劣化は見られない。



遺構	層位	参考		
		土色	土性	備考
SI242	1	10YR4/6褐色	砂質シルト	砂質シルト 黄褐色シルトブロックを少量含む
	2	25Y4/1褐色	粘土シルト	住居内堆積土。土を多量、炭化物を少量含む
	3	10YR5/4にぶい黄褐色	砂質シルト	住居内堆積土。灰褐色シルトブロックを多量に含む
	4	25YR4/6赤褐色	砂質シルト	カマド内堆積土。炭化物、灰褐色シルトブロックを少量含む
	5	10YR6/0暗褐色	砂質シルト	カマド袖。灰褐色シルトブロックを少量含む
	6	10YR4/4褐色	砂質シルト	地土。灰褐色シルトブロックを少量含む。マンガン粒子を多量に含む。弱い被熱
	7	25YR6/6褐色	砂質シルト	地土。硬化層。地山が被熱により硬化
	8	10YR5/3暗褐色	粘土シルト	掘り方埋土。灰褐色シルトブロックを少量含む
P1	1	10YR6/2灰褐色	粘土シルト	粘土シルト。海藻粒子を少量含む
	2	10YR2/2黒色	粘土シルト	粘土シルト。黄褐色シルトブロックを少量含む
P2	1	10YR4/1褐色	砂質シルト	

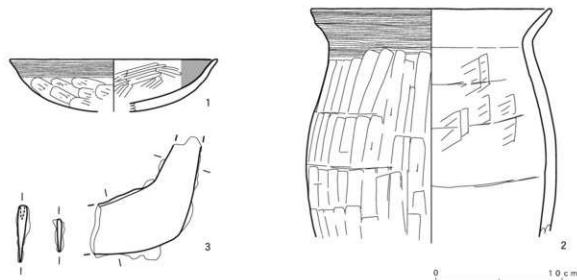
第7図 SI242竪穴住居跡・遺物出土状況図

### 1. 壁穴住居跡

その他の施設：床面検出時にピットを2基検出した。P1の平面形は直径0.5mの円形で、深さは25cmである。堆積土は2層で、浅いガカラードとの位置関係から貯蔵穴の可能性がある。P2の残存部の平面形は、直径0.3mの半円形で、床面から底までの深さは15cmである。

出土遺物：先述の甕の他に、床面直上からは土師器杯C-2や鉄製品N-2などが出土した。鉄製品は腐食が進行していた。X線写真撮影でも、種類を特定することができなかったが、形状から「U字形鍛鍊先」の可能性がある。

出土した遺物から奈良時代に属する遺構と考えられる。



No.	遺構・層位	種別・器種	遺存度	外面	内面	法規	法規	写真図版番号	登録番号
						寸法(cm)	高さ(cm)	幅さ(cm)	
1	SI242・2層	土器器・杯	1/4	ヨコナデ・ヘラケズリ	ヘミガキ・黒色処理	(0.66)	5.7	12-6	C-2
2	SI242・4層	土師器・甕	2(口縁部・底部)	ヨコナデ・ヘラナダ	ヨコナデ・ヘラナダ	19.2	—	(18.3)	11-8 C-6

No.	遺構・層位	種別・器種	法規				
			長さ(cm)	幅さ(cm)	厚さ(cm)	写真図版番号	登録番号
3	SI242・2層	鉄製品・U字形鍛鍊先	(12.0)	2.2-4.5	0.7	13-7	N-2

第8図 SI242壁穴住居跡出土遺物

・SI245壁穴住居跡

遺構の確認：7D、7EグリッドのV層上面で確認した壁穴住居跡で、SI242より新しい。検出時はSI242を切る溝と考えていたが、壁面がほぼ垂直に立ち上がることや、平面形などから、壁穴住居跡と判断した。

平面形・規模：方形と考えられる。規模は南北4.0m、東西の残存長0.8mである。検出面から床面までの深さは36cmである。

方向：西壁を基準とした建物方向はN-4°-Eである。

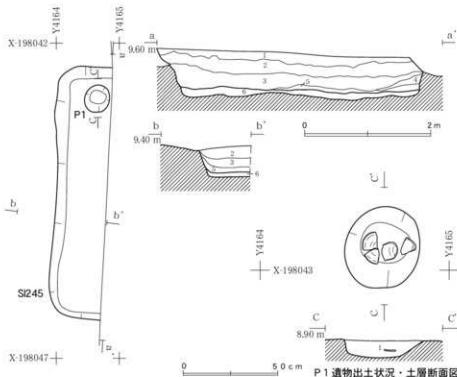
堆積土：5層確認し、自然堆積層と考えられる。

壁：床面から急角度で立ち上がる。

床面：掘り方埋土の上面を床面としている。

周溝・柱穴・カマド：確認できなかった。

その他の施設：床面検出時に、北側でP1を検出した。平面形は直径50cmの円形で、深さは25cmである。



遺構	層位	土色	土性	備考	
				SI245	P1
SI245	1	10YR3/3暗褐色	粘土質シルト	住居内堆積土	にぶい褐色シルトブロックを少量含む
	2	7.5YR3/3暗褐色	砂質シルト	住居内堆積土	
	3	10YR2/3黒褐色	砂質シルト	住居内堆積土	黄褐色シルトブロックを少量含む
	4	10YR4/3にぶい黃褐色	粘土質シルト	住居内堆積土	灰褐色シルトブロック、明褐色シルトブロックを少量含む
	5	10YR4/4褐色	粘土質シルト	住居内堆積土	
	6	10TR4/2灰褐色	粘土質シルト	繰り方理め土	黄褐色シルトブロックを多量に含む
P1	1	10TR4/2灰褐色	粘土質シルト	黄褐色シルトブロックをまばらに含む	

第9図 S1245 積穴住居跡・遺物出土状況図

出土遺物：堆積土中から手づくね土器が出土した。用途は不明である。底部に穿孔されている。また、P1の底面から須恵器E-2の环身が割れた状態で出土した。須恵器E-2は、器形や調整技法の特徴から奈良時代の遺物と考えられる。

出土した遺物から奈良時代に属する遺構と考えられる。



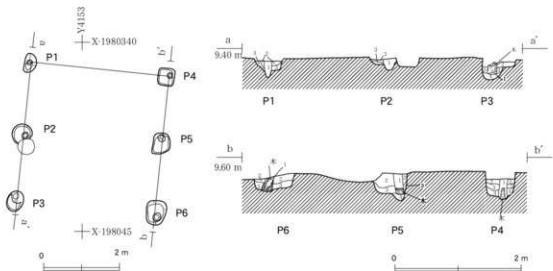
No.	遺構・層位	種別・器形	遺存度	外面	内面	法線				備考	号	壁厚
						D(径)(cm)	H(高さ)(cm)	底径(径)(cm)	底径/口径			
1	SI245・堆積土 土器部・下づき	ナヂ	5/6	ナヂ	ナヂ	(3.7)	2.7	2.9	-	須恵器	13-4	C-1
2	P1・1層 須恵器・环	完形	ロクロナヂ・底部手持ハラケズリ	ロクロナヂ	ロクロナヂ	14.5	6.0	5.8	0.41		11-1	E-2

第10図 S1245 積穴住居跡出土遺物

## 2. 挖立柱建物跡

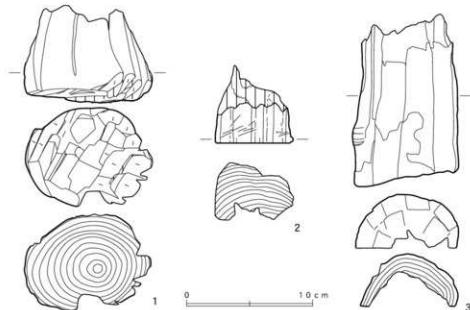
### ・SB338掘立柱建物跡

5D、6DグリッドのV層上面で確認した。桁行2間以上×梁行1間の南北棟(3.7m以上×3.7m)であるが南北へ延びる可能性がある。建物の方向は、N-4°-Eである。柱間寸法は桁行が1.6~2.1mで、梁行が3.7mである。掘り方の平面形はP5とP6は隅丸方形、その他は円形もしくは楕円形で、直径あるいは一边約50cm、深さは20cmである。すべての柱穴で柱痕跡や柱根を確認できたが、P3・P4・P5・P6には柱根が残っていた。柱根の直径は0.15mである。P4の柱根は取り上げて試みたが、土壌化が進んでいたため、材は残らなかった。P6出土の柱根を分析したところ、樹種はクリで、年代は18世紀中頃である確率が高いとの結果を得ている。遺物は、P6から土師器小片が出土したのみであった。



遺構	編号	土色	土性	備考
P1	1	10YR4/1 黄褐色	砂質シルト	柱痕跡
	2	10YR2/3 黒褐色	砂質シルト	掘り方理土、黄褐色シルトブロックを微量に含む
	3	7.5YR3/2 單純色	粘土質シルト	掘り方理土
P2	1	10YR4/3 にい黄褐色	粘土質シルト	柱痕跡
	2	10YR4/2 灰褐色	砂質シルト	掘り方理土、黄褐色シルトブロックを少量、明褐色細砂ブロックを微量に含む
	3	7.5YR3/4 單純色	砂質シルト	掘り方理土
P3	1	10YR4/1 黄褐色	砂質シルト	掘り方理土
	2	10YR3/3 にい黄褐色	粘土質シルト	掘り方理土
	3	10YR4/2 灰褐色	粘土質シルト	掘り方理土
	4	10YR5/1 黄褐色	粘土質シルト	掘り方理土
P4	1	10YR3/2 黑褐色	粘土質シルト	柱痕跡
	2	10YR3/3 單純色	砂質シルト	掘り方理土、黄褐色シルト粒を微量に含む
	3	10YR2/2 黑褐色	砂質シルト	掘り方理土、黄褐色シルトブロックを少量含む
	4	7.5YR3/4 單純色	粘土質シルト	掘り方理土、黄褐色シルトブロックを多量に含む
P5	1	2.5Y4/1 黄褐色	粘土質シルト	柱痕跡
	2	2.5Y5/1 黄灰褐色	粘土質シルト	掘り方理土
	3	10YR3/3 單純色	砂質シルト	にい黄褐色シルトブロックを少量含む
	4	2.5Y4/1 黄灰褐色	砂質シルト	掘り方理土、黄褐色シルトブロックを少量含む
P6	1	10YR2/1 黒色	粘土質シルト	柱痕跡
	2	10YR4/2 灰褐色	砂質シルト	掘り方理土、にい黄褐色シルトブロックを少量含む
	3	7.5YR3/1 黑褐色	粘土質シルト	掘り方理土、にい黄褐色シルトブロックを少量含む

第11図 SB338掘立柱建物跡

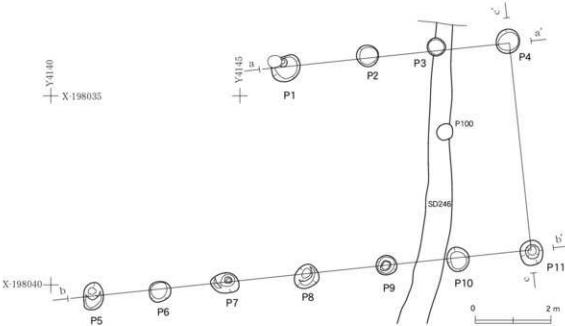


No.	遺構・層位	種別・器種	樹種	法線				備考	写真図版番号	登録番号
				長さ(cm)	横幅(cm)	厚幅(cm)	柱穴(cm)			
1	P3	柱材	クリ	(12.9)	16.9	13.0	芯持ち	13-10	L-1	
2	P5	柱材	クリ	(7.0)	(7.0)	(10.3)		15.9	L-2	
3	P6	柱材	クリ	(22.8)	(7.0)	(13.9)	芯持ちか	13-8	L-3	

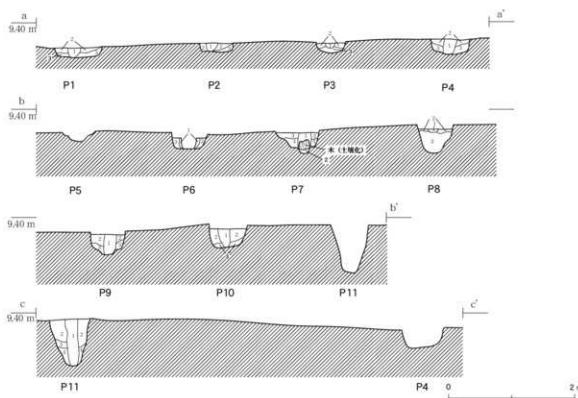
第12図 SB338掘立柱建物跡出土遺物

## ・SB339掘立柱建物跡

3 C、4 B、4 C、5 B、5 C グリッドのV層上面で確認した。SB339-P3がSD246を切っているので、SD246より新しい遺構である。桁行6間以上×梁行1間の東西棟(11.7m以上×5.6m)と考えられる。建物の北西側の柱穴は検出できなかったが、平行する柱穴列を一つの建物として捉えた。しかし、P 5とP 6についてでは間隔がやや狭いため、別の遺構の可能性もある。建物の方向は、N-85°-Eである。柱間寸法は桁行が1.8~2.1m、梁行が5.6mである。掘り方の平面形は直径60cmの円形で、深さは南側の柱穴列が40~80cm、北側の柱穴列が25~40cmである。柱痕跡はすべての柱穴で確認できた。直径は20~30cmである。このうちP 7には大きさは直径20cm、長さ15cmの柱根が残存していた。残存状況は悪く、木片が断片的に残っていたに留まる。遺物は出土しなかった。



2. 据立柱建物跡



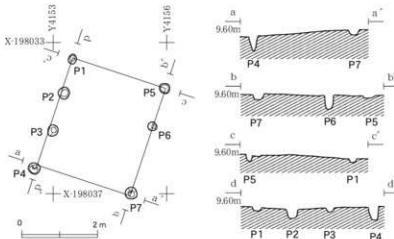
遺構	層位	土色	土性	備考
P1	1	10YR4/1 黄褐色	砂質シルト	柱礎跡、黄褐色シルトブロックを多量に含む
	2	10YR4/3 暗褐色	砂質シルト	砂の力埋土、黄褐色シルトブロックを微量に含む
	3	10YR3/3に近い黄褐色	シルト	砂の力埋土、黄褐色シルトブロックを微量に含む
P2	1	2.5Y4/1 黄褐色	砂質シルト	柱礎跡、黄褐色シルトブロックを微量に含む
	2	10YR3/3 暗褐色	砂質シルト	砂の力埋土、黄褐色シルトブロックを多量に含む
	3	10YR4/2 暗褐色	粘土質シルト	砂の力埋土
P3	1	2.5Y4/2 黑灰色	砂質シルト	柱礎跡
	2	10YR2/2 黑灰色	粘土質シルト	砂の力埋土、黄褐色シルトブロックを少量含む
	3	2.5Y5/2 黑灰色	砂質シルト	砂の力埋土、有机物を多量に含む、黄褐色シルトブロックを少量含む
P4	1	10YR4/1 黄褐色	粘土質シルト	柱礎跡、廻白色シルトブロックを微量に含む
	2	10YR3/3 暗褐色	砂質シルト	砂の力埋土、褐色ブロックを微量含む
	3	10YR3/3に近い黄褐色	砂質シルト	砂の力埋土、黄褐色シルトブロックを少量含む
P6	1	10YR4/2 黑灰色	砂質シルト	柱礎跡
	2	10YR3/3に近い黄褐色	砂質シルト	砂の力埋土、灰褐色シルトブロックを少量含む
	3	10YR4/4 黄褐色	砂質シルト	砂の力埋土、灰化物を微量に含む
P7	1	10YR4/1 黑灰色	粘土質シルト	柱礎跡
	2	10YR3/3 暗褐色	シルト	砂の力埋土、黄褐色シルトブロックを多量に含む
	3	10YR3/3 暗褐色	砂質シルト	砂の力埋土、黄褐色シルトブロックを微量含む
	4	10YR4/1 黑灰色	砂質シルト	砂の力埋土
P8	1	10YR4/1 黑灰色	砂質シルト	柱礎跡
	2	10YR3/3 暗褐色	砂質シルト	砂の力埋土、黄褐色シルトブロックを微量含む
	3	10YR3/3に近い黄褐色	砂質シルト	砂の力埋土、黄褐色シルトブロックを微量含む
P9	1	2.5Y4/1 黄褐色	粘土質シルト	柱礎跡、有机物を多量に含む、黄褐色シルトブロックを微量に含む
	2	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	砂の力埋土、黄褐色シルトブロック、黑色シルト板を微量に含む
	3	10YR4/2 黑灰色	シルト	砂の力埋土、有机物を多量に含む、黄褐色シルトブロックを微量に含む
P10	1	2.5Y4/1 黄褐色	粘土質シルト	柱礎跡、廻白色シルトブロックを少量含む
	2	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	砂の力埋土、黄褐色シルトブロックを微量に含む
	3	2.5Y4/1 黄褐色	粘土質シルト	砂の力埋土、黄褐色シルトブロックを微量含む
P11	1	10YR3/2 黑灰色	砂質シルト	柱礎跡、灰白色シルトブロックを少量含む
	2	10YR3/3 暗褐色	砂質シルト	砂の力埋土、黄褐色シルトブロックを少量含む
	3	10YR3/1 黑灰色	粘土質シルト	砂の力埋土
	4	2.5Y3/1 黄褐色	粘土質シルト	砂の力埋土、黄褐色シルトブロックを少量含む

第13図 SB339据立柱建物跡

## ・SB340掘立柱建物跡

5 B. 5 C. 6 B. 6 C グリッドの V 層上面で確認した。桁行 3 間×梁行 1 間の南北棟（総長3.1m×2.7m）の掘立柱建物である。建物の方向は、N -20° - E である。柱間寸法は桁行が 1.0m、梁行が 2.7m である。掘り方の平面形は直径20~30cmの円形で、深さは10~40cmである。柱痕跡は P 4 と P 7 の底面で確認できた。いずれも平面形は円形で、直径15cmである。

遺物は土器小片が 4 点出土した。

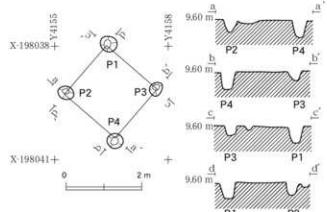


第14図 SB340掘立柱建物跡

## ・SB341掘立柱建物跡

6 C グリッドの V 層上面で確認した。柱間が SB338 や SB339 に近いことや SD28 と平行していることから、副屋を想定して提示した。桁行1間×梁行1間（1.7m × 1.7m）の掘立柱建物の可能性がある。建物の方向は、N -40° - E である。掘り方の平面形は直径40cmの円形、深さは 25~40cm である。柱痕跡は確認できなかつた。

遺物は土器小片が 4 点出土した。



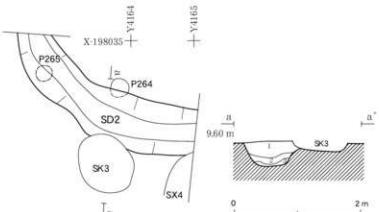
第15図 SB341掘立柱建物跡

## 3. 溝跡

## ・SD2溝跡

7 C グリッドの IV 層上面で確認した。P264、P265 を切り、SK3、SX4 に切られている。断面形は U 字形である。長さは 3.4m で、幅は 0.8m、深さは 40cm である。堆積土は 3 層で、自然堆積と考えられる。遺物は土器器の裏（D - 1、写真図版12 - 12）や壺、壺などの小片が、1 層の下部と 2 層を中心に約 170 点出土した。

出土遺物から、平安時代中頃に属する可能性がある。



遺構	層位	土色	土性	備考
SD2	1	10YR2/2 黒褐色	砂質シルト	
	2	10YR3/1 黒褐色	砂質シルト	黄褐色シルトブロックを多量含む
	3	10YR5/6 黄褐色	砂質シルト	

第16図 SD 2 溝跡



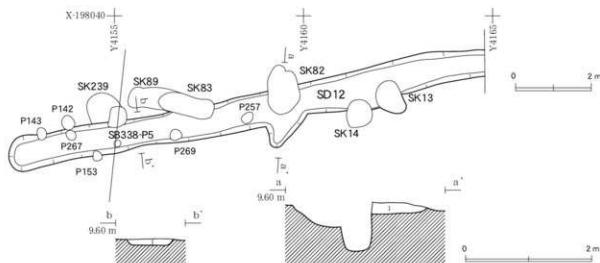
No.	遺構・層位	種別・器種	遺存度	外面	内面	法線	写真回数番号	登録番号
1	SD2・培塿土	土師器・甕	1/4	ロクロナデ	ロクロナデ	(14.5)	-	9.1 12-9 D-1

第17図 SD 2溝跡出土遺物

## ・SD 12溝跡

5D、6D、7DグリッドのV層上面で確認した。SK13、SK14、SK82、SK83、SK89、SB338-P5など、SK239以外の遺構に切られている。遺構の東端は調査区外まで延びている。方向は、N-78°-Eである。検出した溝跡の中央で南側に一部が張り出している。長さは12.5mで、幅は0.6~0.9m、深さは10~20cmである。底面の標高は西端・東端とともに9.2mで、ほぼ平坦である。堆積土は1層で、断面形は逆台形である。遺物は土師器甕や壺の小片が約35点出土した。土師器D-14は底面から出土したもので、平安時代中頃の遺物と推定される。

出土遺物から平安時代中頃に属する可能性がある。



遺構	層位	土色	土性
SD12	1	10YR2/3黒褐色	砂質シルト

第18図 SD 12溝跡



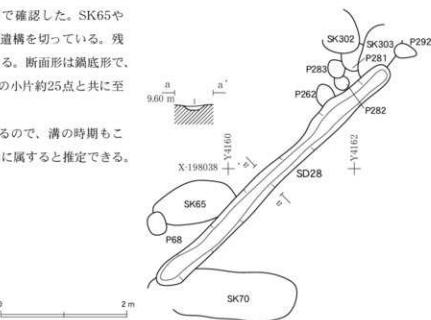
No.	遺構・層位	種別・器種	遺存度	外面	内面	法線	写真回数番号	登録番号
1	SD12・1層	土師器・甕	1/6	ロクロナデ・ヘラケズリ	ロクロナデ	(27.0)	-	8.1 12-11 D-14

第19図 SD 12溝跡出土遺物

## ・SD28溝跡

6 C.、7 C グリッドのIV 層上面で確認した。SK65や SK70、SK303などの重複する他の遺構を切っている。残存長5m、幅0.35m、深さ10cmである。断面形は鍋底形で、堆積土は1層である。遺物は土師器の小片約25点と共に至大通寶が出土した。

至大通寶は初鑄年が1310年であるので、溝の時期もこれに遡らないと考えられ、中世以降に属すると推定できる。



遺構	層位	土色	土性
SD28	1	10YR2/3 黒褐色	砂質シルト

第20図 SD28溝跡



第21図 SD28溝跡出土遺物

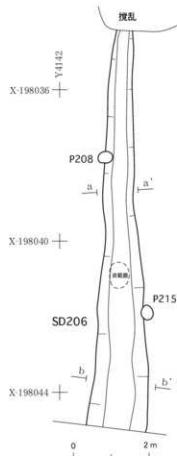
### 3. 溝跡

#### ・SD206溝跡

3 B、3 C、3 DグリッドのV層上面で確認した。南北へ直線的に延び、南、北両側とも調査区の外に続く。方向は、N = 0° - Eである。P208やP215に切られている。残存長は0.5m。残存幅は北部で0.6m、南部で1.4mを計り、南に向かって徐々に広くなっている。検出面からの深さは南部で40cm、北部では20cmである。底面の標高は北部で9.2m、南部で9.1mと若干南へ傾斜している。

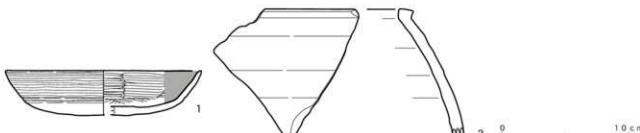
堆積土は、南側は7層、北側は2層で、自然堆積によるものである。遺物は、土師器の小片や須恵器が出土したが量は少ない。土師器C-8は器形から奈良時代に属すると考えられる。E-8は短頸の須恵器甕である。両者とも中ほどの層から出土した。

これらの出土遺物から奈良時代には機能していた可能性がある。



遺構	層位	土色	土性	備考
SD206 (北セクション)	1	10YR3/3 單純色	砂質シルト	黄褐色シルトブロックを少數含む
	2	10YR4/2 單純色	砂質シルト	黄褐色シルトブロックを多量に含む
SD206 (南セクション)	1	10YR5/2 單純色	砂質シルト	褐色粒子を多量に含む
	2	10YR4/1 單純色	砂質シルト	黄褐色シルトブロックを少數含む
	3	10YR5/4 にぶい黄褐色	粘土質シルト	
	4	10YR2/3 黒褐色	砂質シルト	
	5	2.5YR2/2 單純色	粘土質シルト	にぶい赤褐色粒子を少數含む
	6	10YR3/4 單純色	粘土質シルト	炭化物を微量に含む
	7	7.5YR4/3 黑褐色	粘土質シルト	

第22図 SD206溝跡



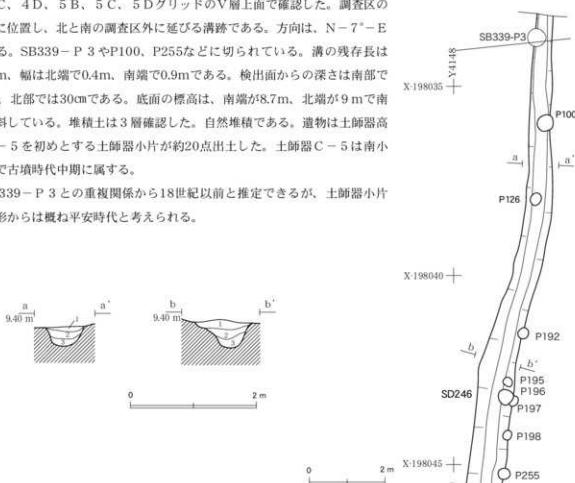
No.	遺構・層位	種別・器種	遺存度	外面	内面	法厚	法厚	写真回数	登録番号	
					口径(cm)	底径(cm)	壁高(cm)			
1	SD206・堆積土	土師器・坏	1/4	ヨコナデ・ケズリ・ミガキ	ヨコナデ・ミガキ・黒色薙削	(15.6)	(7.5)	3.5	12-5	C-8
2	SD206・堆積土	須恵器・甕	1/12	ロクロナデ	ロクロナデ	(18.0)	-	(10.2)	13-3	E-1

第23図 SD206溝跡出土遺物

## ・SD246溝跡

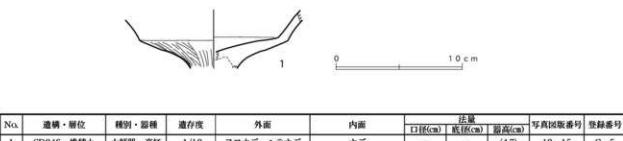
4 C、4 D、5 B、5 C、5 DグリッドのV層上面で確認した。調査区の中央に位置し、北と南の調査区外に延びる溝跡である。方向は、N-7°-Eである。SB339-P 3やP100、P255などに切られている。溝の残存長は12.6m、幅は北端で0.4m、南端で0.9mである。検出面からの深さは南部で40cm、北部では30cmである。底面の標高は、南端が8.7m、北端が9 mで南に傾斜している。堆積土は3層確認した。自然堆積である。遺物は土師器高环C-5を初めとする土師器小片が約20点出土した。土師器C-5は南小泉式で古墳時代中期に属する。

SB339-P 3との重複関係から18世紀以前と推定できるが、土師器小片の器形からは概ね平安時代と考えられる。



遺構	層位	土色	土性	備考
SD246 (南・北セクション)	1	10YR2/3 黒褐色	砂質シルト	
	2	2.5Y3/2 黒褐色	砂質シルト	黄褐色シルトブロックを含む
	3	10YR4/3 にいぶ黒褐色	粘土質シルト	炭化物を微量に含む 黄褐色シルトブロックを多量に含む

第24図 SD 246溝跡



第25図 SD 246溝跡出土遺物

#### 4. 土坑

##### ・SK1土坑

7 C グリッドのV層上面で確認した。SD2に切られている。確認できた平面形は0.8m×0.55mの不整形で、調査区外へ続く。深さは25cmである。断面形は半円形で、堆積土は1層である。遺物は土師器小片が6点出土した。

##### ・SK3土坑

7 C グリッドのV層上面で確認した。SD2を切っている。平面形は、1.0m×0.8mの楕円形で、深さは15cmである。断面形は逆台形で、堆積土は1層である。遺物は土師器小片が約10点出土した。

##### ・SK5土坑

7 C グリッドのV層上面で確認した。SX4に切られている。平面形は、直径1.0mの不整形と考えられ、深さは15cmである。断面形は逆台形で、堆積土は1層である。遺物は土師器小片が1点出土した。

##### ・SK13土坑

7 D グリッドのV層上面で確認した。SD12を切っている。平面形は0.95m×0.7mの不定形で、深さは15cmである。断面形は逆台形で、堆積土は2層である。遺物はロクロ調整の土師器坏D-4（第28図1）や甕、須恵器の小片などが約10点出土した。

##### ・SK14土坑

7 D グリッドのV層上面で確認した。SD12を切っている。平面形は、直径0.8mの円形で、深さは20cmである。断面形は逆台形で、堆積土は1層である。遺物は土師器と須恵器の小片が約10点出土した。

##### ・SK23土坑

7 E グリッドのV層上面で確認した。SI242を切っている。平面形は0.9m×0.7mの楕円形で、深さは10cm、底面は平坦である。堆積土は1層で、出土遺物は土師器甕などの小片が約5点出土したのみである。

##### ・SK82土坑

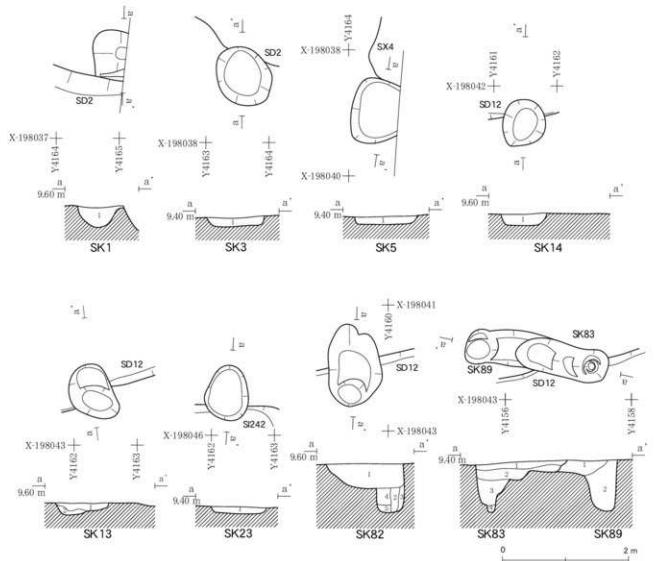
6 D グリッドのV層上面で確認した。SD12を切っている。平面形は、1.3m×1.1mの不定形で、深さは最深部で0.8mである。堆積土は5層である。最上層は黄褐色シルトブロックを多量に含んでいた。埋土の状況から柱を抜き取った跡と考えられるが、下部の柱穴と上部の土坑が重なっている可能性もある。SK83やSK89と同様の断面形である。遺物は土師器の小片が約10点出土した。

##### ・SK83・SK89土坑

6 D グリッドのV層上面で確認した。SK83はSK89とSD12を切っている。SK82とは平面・断面形が異なるが、同様の深部と浅部を持つ土坑が重なっていると判断した。埋土の状況から柱を抜き取った跡と考えられる。ただし、SK82の性格や埋土の状況を考えると、柱抜き取り跡ではない可能性もある。平面形は2.2m×0.7mの溝状で、最深部で0.8mである。遺物は土師器の小片が約10点出土した。

##### ・SK231土坑

2 C グリッドのV層上面で確認した。P230に切られている。平面形は1.4m×1.2mの不整形で、深さは30cmである。断面形は段をもつ鍋底形で、堆積土は4層確認した。土層断面からは1・2層と3・4層が異なる構造であり、2基の土坑が重なっている可能性も考えられるが、平面形や出土遺物からは明確な相違を確認できなかった。遺物は土師器と須恵器の小片が約15点出土した。



遺構	層位	土色	土性	備考
SK1	1	10YR3/3 嫩褐色	砂質シルト	
SK3	1	10YR3/3 嫩褐色	砂質シルト	
SK5	1	10YR3/3 嫩褐色	砂質シルト	
SK13	1	10YR3/3 嫩褐色	砂質シルト	炭化物を多様に含む
	2	10YR2/2 嫩褐色	粘土質シルト	にぶい褐色シルトブロックを少量含む
SK14	1	10YR2/3 黒褐色	砂質シルト	赤色シルト層を少量含む
SK23	1	10YR2/3 黑褐色	粘土質シルト	
	1	10YR4/2 灰褐色	砂質シルト	黄褐色シルトブロックを多量に含む
	2	2.5Y4/1 嫩灰色	粘土質シルト	黄褐色シルトブロックを少量化する
	3	10YR4/1 嫩褐色	粘土質シルト	
	4	2.5Y4/1 嫩灰色	粘土質シルト	黄褐色。灰白色粘土ブロックを少量含む
	5	10YR4/1 嫩褐色	粘土質シルト	
SK82	1	10YR3/3 嫩褐色	砂質シルト	
	2	7.5Y3/1 嫩褐色	粘土質シルト	黄褐色シルトブロックを少量化。灰白色シルトブロックを微量に含む
	3	10YR5/1 嫩褐色	粘土質シルト	黄褐色シルトブロックを少量化する
	4	2.5Y4/1 嫩灰色	粘土質シルト	
SK83	1	10YR5/4 こいの黄褐色	砂質シルト	灰褐色シルトブロックを多量含む
	2	10YR3/3 嫩褐色	粘土質シルト	黄褐色シルトブロックを微量含む
SK89	1	10YR3/1 嫩褐色	砂質シルト	
	2	10YR3/3 嫩褐色	粘土質シルト	

第26図 土坑

#### 4. 土坑

##### ・SK240土坑

2 DグリッドのV層上面で確認した。平面形は1.0m×0.7mの不整円形で、深さは30cmである。断面形は半円形で、堆積土は2層確認した。遺物は土師器の小片が約5点出土した。

##### ・SK278土坑

7 Cグリッドで確認した。SK302を切っている。断面観察の結果、IV層から掘り込んでいる土坑と確認できた。平面形は1.05m×1.0mの不整円形で、深さは25cmである。断面形は鍋底形で、堆積土は2層である。遺物は、堆積土中から土師器の甕や壺など約80点の土器小片が出土した。壺は、土師器、須恵器、赤焼土器があるが、いずれも口部調整で、底部は回転糸切り無調整である(第28図3～9)。出土遺物から、平安時代中頃に属する遺構と考えられる。

##### ・SK289土坑

6 CグリッドのV層上面で確認した。SK297やP298、P332を切り、P284やP299に切られている。平面形は直径1.1mの不整円形で、深さは0.3mである。断面形は半円形で、堆積土は1層である。遺物は土師器や須恵器の甕が約35点出土した。須恵器E-4とE-5はタタキにより整形されているが、E-5の内面は平滑になっている部分があり、砥石に転用された可能性がある。

##### ・SK291土坑

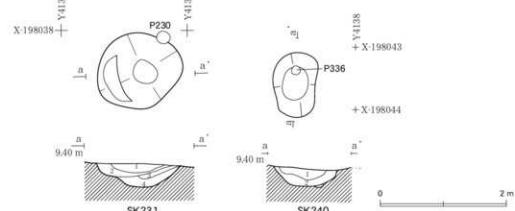
7 CグリッドのV層上面で確認した。P287以外の重複する遺構に切られている。平面形は0.9m×0.7mの楕円形で、深さ20cmである。断面形は半円形で、堆積土は1層である。堆積土に焼土ブロックが多量に混じっていたが、硬化面は認められなかった。出土遺物は土師器の杯や甕の小片が約10点出土した。

##### ・SK297土坑

6 CグリッドのV層上面で確認した。SK289やP260をはじめとする重複している遺構に切られている。平面形は1.05m×0.7mの楕円形で、深さは20cmである。断面形は半円形で、堆積土は1層である。出土遺物はない。

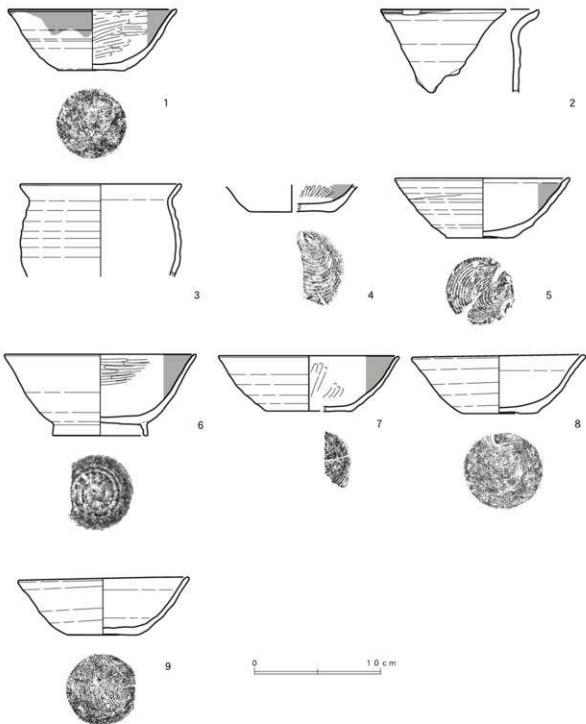
##### ・SK302土坑

7 CグリッドのV層上面で確認した。SK278に切られている。平面形は直径0.6mの不整円形で、深さは15cmである。断面形は半円形で、堆積土は1層である。土師器小片が約10点出土した。



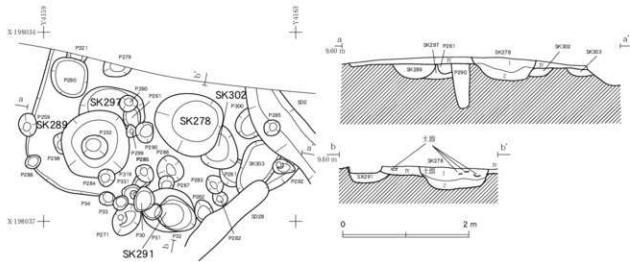
遺構	層位	土色	土性	備考
SK231	1	10YR4/1褐色灰色	砂質シルト	炭化物を微量に含む
	2	10YR5/2灰褐色	粘土質シルト	炭化物を微量に含む
	3	10YR4/2灰褐色	粘土質シルト	炭化物を少量化
	4	10YR3/1黒褐色	粘土質シルト	
	5	10YR2/2黒褐色	粘土質シルト	炭化物を少量化
SK240	1	10YR2/2黒褐色	粘土質シルト	炭化物、褐色シルトブロックを少量化
	2	10YR4/1褐色灰色	粘土質シルト	炭化物、褐色シルトブロックを少量化

第27図 土坑



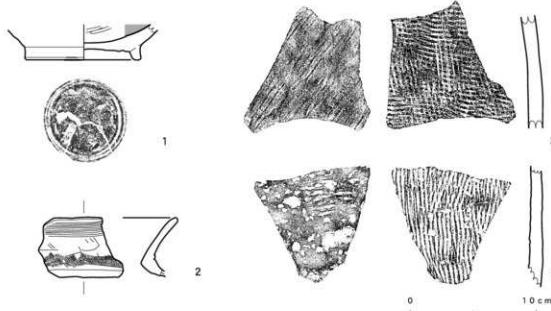
No.	遺構・層位	種別・器種	遺存度	外面	内面	底径(cm)	壁厚(cm)	高さ(cm)	底径/口徑	備考	採取番号	登録番号
1	SK13・1層	土師器・环	5/12	口縁部にロクロナフ、底脚部に切削痕	ヘラミガキ・黒色処理	(13.4)	5.5	4.9	0.41	外表面化	11-3	D-4
2	P21	土師器・甕	1/6	ロクロナフ	ロクロナフ	(22.4)	—	6.7	—	—	12-10	D-9
3	SK278・埴粘土	土師器・甕	1/4	ロクロナフ	ロクロナフ	(12.8)	7.0	—	—	—	12-13	D-3
4	SK278・埴粘土	土師器・甕	1/3	ロクロナフ・底脚部底面切り無調整	ヘラミガキ・黒色処理	(7.0)	2.0	—	—	—	12-8	D-11
5	SK278・埴粘土	土師器・环	1/6	ロクロナフ・底脚部底面切り無調整	ヘラミガキ・黒色処理	(13.8)	5.3	4.8	0.38	内面素面	11-2	D-10
6	SK278・埴粘土	土師器・高台輪	口縁1/4・底合3/4	ロクロナフ	ヘラミガキ・黒色処理	(15.3)	7.7	6.6	0.5	—	11-5	D-5
7	SK278・埴粘土	土師器・环	1/4	ロクロナフ・底脚部底面切り無調整	ヘラミガキ・黒色処理	(14.4)	6.8	4.4	0.47	—	12-1	D-2
8	SK278・埴粘土	赤燒土器・环	完形	ロクロナフ・底脚部底面切り無調整	ロクロナフ	(13.7)	6.1	4.8	0.45	—	11-6	D-15
9	SK278・埴粘土	須唇器・环	2/3	ロクロナフ・底脚部底面切り無調整	ロクロナフ	(13.4)	5.6	4.7	0.41	—	11-4	E-3

第28図 土坑出土遺物



遺構	層位	土色	土性	備考
SK278	1	2.5Y4/1 黄灰色	砂質シルト	焼土ブロック、焼土粒を多量に含む
	2	2.5Y5/2 咸灰黄色	砂質シルト	赤灰褐色シルトブロックを多量に含む
P279	1	10YR3/3 黑褐色	砂質シルト	赤褐色シルトブロックを少量含む
	2	10YR2/2 黑褐色	砂質シルト	赤褐色シルトブロックを少量、黒色粒子を微量に含む
SK289	1	10YR3/3 黑褐色	砂質シルト	炭化物、黄褐色シルトブロックを少量含む
	2	10YR3/4 黑褐色	砂質シルト	赤褐色シルトブロックを多量に含む
SK291	1	10YR4/1 黄灰色	砂質シルト	赤褐色シルトブロックを少量含む
	2	10YR5/4c ぶい 黄褐色	砂質シルト	炭化物を少量含む 焼土ブロックを多量に含む
SK297	1	10YR3/2 黑褐色	砂質シルト	赤褐色シルトブロックを少量含む
SK298	1	10YR3/3 黑褐色	砂質シルト	赤褐色シルトブロックを少量含む
SK302	1	10YR4/1 黄灰色	砂質シルト	赤褐色シルトブロックを少量含む

第29図 7グリッド北部遺構



No.	遺構・層位	種別・器種	遺存度	外観	法線			備考	写真撮影日	写真番号
					口(径)(cm)	底(径)(cm)	高さ(cm)			
1	IV層 土師器・鉢	高台形	底部斜面切打・造り付け台	ヘラミガキ・黑色處理	9.2	(2.9)	—	12-4	D-8	
2	SK289・堆積土 土師器・鉢	1/1.2	ヨコナデ・ハケ型	ヘラナギ・ハケ型	—	(4.7)	—	12-14	C-4	
3	SK289・堆積土 陶器器・鉢	-	タタキ	アテ具痕	—	(9.1)	—	13-2	E-4	
4	SK289・堆積土 陶器器・鉢	-	タタキ	アテ具痕	—	(9.3)	—	既に削除済	E-5	

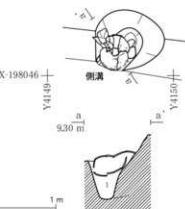
第30図 7グリッド北部遺構出土遺物

## 5. ピット

### ・P254ピット

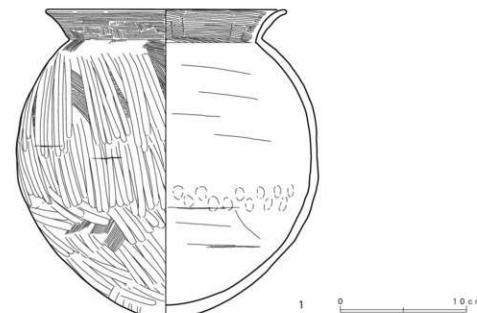
4 E グリッドのV層上面で確認した。調査区外へ続いているため、全形は明らかではないが、平面形は楕円形と推定される。残存している幅は0.5m、深さは50cmである。

土師器甕C-7が、口縁部を北西に向け、横倒しになって割れた状態で出土した。出土した甕は器壁が薄く、口縁部はヨコナデ、体部は縦方向へのハケ目調整の後、ヘラミガキが施されている。口縁は強く外反し、体部は球体である。これらの特徴から、塩釜式に比定できる。よって、遺構の時期は古墳時代前期と考えられる。



遺構	層位	土色	土性	備考
P254	1	10YR4/1 黄灰色	砂質シルト	

第31図 P254遺物出土状況図



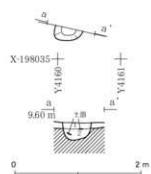
No.	遺構・層位	種別・器種	遺存度	外面	内面	法量			写真図版番号	登録番号
						口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)		
1	P254・1層	土師器・甕	完形	ヨコナデ・ハケ目・ヘラミガキ	ハケ目・ヘラナデ・苗オサエ・ナデ	18.9	3.3	24.6	11-7	C-7

第32図 P254出土遺物

## 5. ピット

### ・P279ピット

7 C グリッドで確認した。断面観察の結果、IV層から掘り込んでいたピットと確認できた。排水溝掘削後に壁面で確認したため、全形の確認には至らなかったが、平面形は、0.4m×0.3mの楕円形と推定でき、深さは25cmである。断面形はU字形で、堆積土は4層である。遺物は須恵器壺（E-6）やロクロ調整の土師器壺（写真図版12-7）、甕などが約15点出土した。



遺構	層位	土色	土性	備考
P279	1	10YR3/3暗褐色	砂質シルト	黄褐色シルトブロックを少量含む
	2	10YR2/2暗褐色	砂質シルト	赤褐色シルトブロックを少量、黒色粒子を微量に含む

第33図 P279ピット



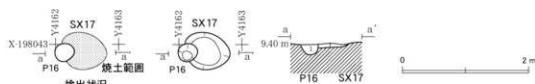
No.	遺構・層位	種別・器種	遺存度	外面	内面	法線				
				口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	底径/口径	写真図版番号	登録番号	
1	P279・2層	須恵器・壺	1/4	ロクロナヂ	ロクロナヂ	(13.8) (5.0)	0.34	0.36	12-2	E-6

第34図 P279ピット出土遺物

## 6. 性格不明遺構

### ・SX17性格不明遺構

7 D グリッドのV層上面で確認した。P16に切られている。平面形は楕円形で、0.7m×0.6mである。検出時には、堅穴住居跡に伴うカマドの燃焼部に伴う可能性も考え周辺を精査したが、壁溝やカマドの袖などは確認できなかつた。被熱による硬化はなく、出土遺物はない。



第35図 SX17性格不明遺構

## 7. その他の出土遺物

調査区南壁面に沿って排水溝を掘削した際に、3D グリッドでVII層から、縄文土器小片A-1が出土した。縄文時代後期と推定される。検出面から1.4mの深さである。なお、下層確認調査では縄文時代の土器や遺構は確認できていない。



No.	遺構・層位	種別・器種	遺存度	外面	内面	法線		
				口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	写真図版番号	登録番号
1	3Dグリッド・排水溝	縄文土器・大鉢か	-	沈痕・ボタン状の貼付文	ナデ・ハケ	-	-	(5.0) 13-6 A-1

第36図 縄文土器

## VII. 自然科学分析

### 1. 柱材の樹種同定

藤根 久 (パレオ・ラボ)

#### 1. はじめに

ここでは、仙台市元袋遺跡の柱穴から出土した木材の樹種同定を行った。なお、P283から出土した柱材についてAMS法による放射性炭素年代測定を行った（放射性炭素年代測定を参照）。

#### 2. 試料と方法

木材試料は、柱穴から出土した柱材3試料である（表1）。試料は、木材の3方向（横断面・接線断面・放射断面）について、剃刀を用いて薄い切片を剥ぎ取り、ガムクローラーで封入して、永久プレバラートを作製した。作製したプレバラートは、光学顕微鏡で木材組織を観察・同定した。

表1 木材の詳細と樹種同定結果

試料No.	遺構名	遺物番号	樹種	備考
1	P248	281	クリ	
2	P268	282	クリ	
3	P283	283	クリ	18世紀初め～18世紀末 (52.0%)

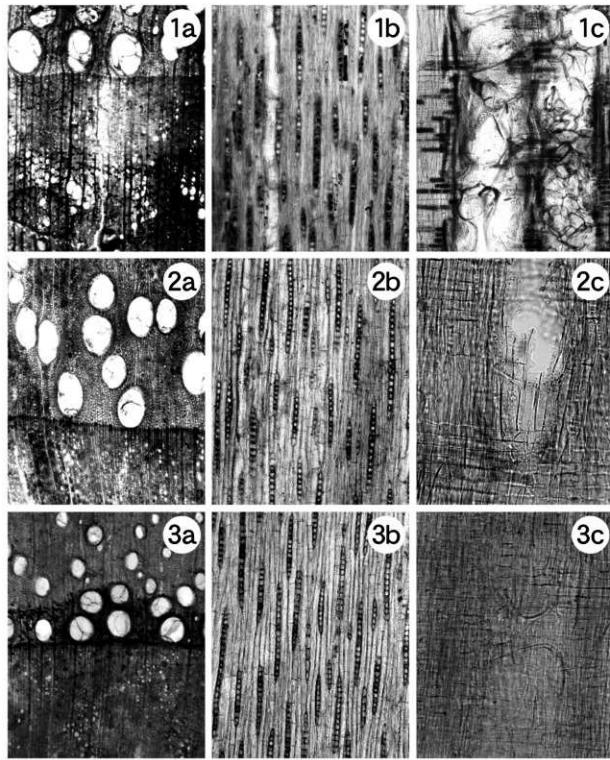
#### 3. 結果

同定した結果、いずれの柱材もクリであった。P283（遺物番号283：PLD-12130～12132）のウィグルマッチングによる年代範囲は、18世紀初め～18世紀末（52.0%）であった。

以下に、同定根拠とした材組織の特徴を記載し、材の3方向の組織写真を提示した。

(1)クリ Castanea crenata Sieb. et Zucc. ブナ科 第37図 1a-1c (No.1), 2a-2c (No.2), 3a-3c (No.3)  
年輪の始めに大型の道管が配列し、幹材部では小型の道管が火炎状に配列する環孔材である。道管の壁孔は小型で交互状、穿孔は單穿孔である。放射組織は同性單列、2-19細胞高である。

クリは、北海道西南部以南の暖帯から温帯下部の山野に普通に生育する落葉高木である。材は粘りがあり耐朽性に優れている。



1a-1c. クリ (No.1, a:20 $\mu$ m, b:50 $\mu$ m, c:50 $\mu$ m)  
2a-2c. クリ (No.2, a:20 $\mu$ m, b:50 $\mu$ m, c:50 $\mu$ m)  
3a-3c. クリ (No.3, a:20 $\mu$ m, b:50 $\mu$ m, c:50 $\mu$ m)

第37図 元袋遺跡出土木材の光学顕微鏡写真 (a: 横断面, b: 接線断面, c: 放射断面)

## 2. 柱材の放射性炭素年代測定

パレオ・ラボAMS年代測定グループ

伊藤茂・丹生越子・廣田正史・瀬谷薰・小林絢一  
Zaur Lomtadidze・Inea Jorjoliani・藤根 久

### 1. はじめに

元袋遺跡より検出された柱材について、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定（ウィグルマッチング法）を行った。

### 2. 試料と方法

測定試料の情報、調整データは表1のとおりである。試料は調整後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンバクトAMS：NEC製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた<sup>14</sup>C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、<sup>14</sup>C年代・曆年代、ウィグルマッチング法による最外試料の曆年代を算出した。

表1 測定試料及び処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-12130	遺跡：P152 遺物 No.283 その他の：ウィグルマッチング試料	試料の種類：生材（クリ） 試料の性状：最終年輪1年輪 状態：wet	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1:2N, 水酸化ナトリウム：1N, 塩酸：3:2N サルフィックス）
PLD-12131	遺跡：P152 試料 No.283 その他の：ウィグルマッチング試料	試料の種類：生材（クリ） 試料の性状：最終年輪から8年輪 状態：wet	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1:2N, 水酸化ナトリウム：1N, 塩酸：3:2N サルフィックス）
PLD-12132	遺跡：P152 試料 No.283 その他の：ウィグルマッチング試料	試料の種類：生材（クリ） 試料の性状：最終年輪から16年輪 状態：wet	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1:2N, 水酸化ナトリウム：1N, 塩酸：3:2N サルフィックス）

### 3. 結果

表2に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（δ<sup>13</sup>C）、同位体分別効果の補正を行って曆年較正に用いた年代値、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した<sup>14</sup>C年代、<sup>14</sup>C年代を曆年代に較正した年代範囲を、ウィグルマッチング結果を、第38図にウィグルマッチング結果をそれぞれ示す。曆年較正に用いた年代値は、今後曆年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて曆年較正を行うため記載した。

<sup>14</sup>C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。<sup>14</sup>C年代（yrBP）の算出には、<sup>14</sup>Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した<sup>14</sup>C年代誤差（±1σ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の<sup>14</sup>C年代がその<sup>14</sup>C年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示すものである。

なお、曆年較正、ウィグルマッチング法の詳細は以下の通りである。

### 曆年較正

曆年較正とは、大気中の<sup>14</sup>C濃度が一定で半減期が5568年として算出された<sup>14</sup>C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の<sup>14</sup>C濃度の変動、及び半減期の違い（<sup>14</sup>Cの半減期5730±40年）を較正することで、より実際の年代値に近いものと算出することである。

<sup>14</sup>C年代の曆年較正にはOxCal3.10（較正曲線データ：INTCAL04）を使用した。なお、1σ曆年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された<sup>14</sup>C年代誤差に相当する68.2%信頼限界の曆年代範囲であり、同様に2σ曆年代範囲は95.4%信頼限界の曆年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に曆年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は<sup>14</sup>C年代の確率分布を示し、二重曲線は曆年較正曲線を示す。それぞれの曆年代範囲のうち、その確率が最も高い年代範囲については、表中に下線で示してある。

## ウイグルマッチング法

試料の年代を得るまでの問題は<sup>14</sup>C年代値から暦年較正を行う際に較正曲線に凹凸があるため単一の測定値から高精度の年代を決定するのが難しいという点である。ウイグルマッチング法では複数の試料を測定し、それぞれの試料間の年代差の情報を用いて試料の年代パターンと、較正曲線のパターンが最も一致する年代値を算出することによって高精度で信頼性のある年代値を求めることができる。

測定では、得られた年輪数が確認できる木材について、1年毎または数年分をまとめた年輪を数点用意し、それぞれ年代測定を行う。個々の<sup>14</sup>C年代値から暦年較正を行い、得られた確率分布を年輪幅だけずらしてすべてを足し合わせることにより最外年輪の確率分布を算出する。この確率分布より年代範囲を求める。

表2 放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$ )	<sup>14</sup> C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$ )	<sup>14</sup> C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1 $\sigma$ 暦年代範囲	2 $\sigma$ 暦年代範囲
PLD-12130	$-27.71 \pm 0.13$	$120 \pm 22$	$120 \pm 20$	1688AD (11.8%) 1706AD 1720AD ( 7.0%) 1731AD 1809AD ( 6.8%) 1820AD 1833AD (35.2%) 1883AD 1914AD ( 7.7%) 1926AD	1681AD (27.7%) 1739AD 1753AD ( 1.7%) 1763AD 1802AD (51.6%) 1895AD 1903AD (14.4%) 1938AD
				1664AD (17.0%) 1680AD 1764AD (35.2%) 1801AD 1939AD (16.1%) 1952AD	1659AD (21.1%) 1684AD 1735AD (53.8%) 1806AD 1930AD (20.5%) 1954AD
				1684AD (12.4%) 1706AD 1720AD ( 7.8%) 1734AD 1807AD ( 7.1%) 1819AD 1833AD (32.0%) 1882AD 1914AD ( 8.8%) 1929AD	1680AD (31.6%) 1764AD 1801AD (49.3%) 1894AD 1905AD (14.5%) 1939AD
				1684AD ( 8.1%) 1695AD 1737AD (38.7%) 1764AD 1771AD ( 6.9%) 1778AD 1931AD (14.5%) 1942AD	1681AD (12.2%) 1703AD 1732AD (52.0%) 1780AD 1808AD ( 4.2%) 1820AD 1845AD ( 8.5%) 1881AD 1923AD (18.5%) 1946AD
最外試料年代					

## 4. 考察

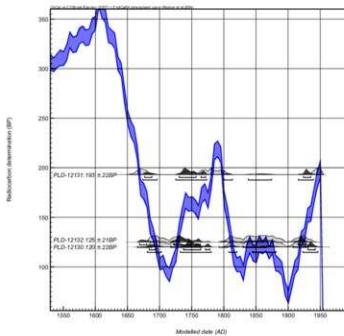
試料について、同位体分別効果の補正及び暦年較正を行い、PLD-12130～12132を用いてウイグルマッチング法により最外試料の暦年代を求めた。

柱材のウイグルマッチング法による年代範囲は、2  $\sigma$  暦年代範囲において1681–1703 calAD(12.2%)、1732–1780 calAD (52.0%)、1808–1820 calAD (4.2%)、1845–1881 calAD (8.5%)、1923–1946 calAD (18.5%)であった。このうち、最も確からしさの確率の高い年代範囲は1732–1780 calAD (52.0%)であり、18世紀中頃の年代範囲である。

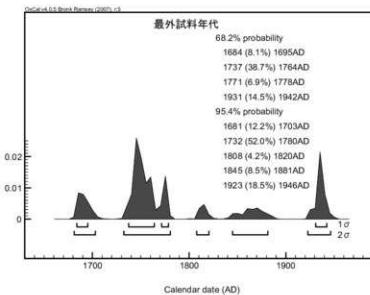
## 参考文献

- Bronk Ramsey, C. (1995) Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy: The OxCal Program. Radiocarbon, 37, 425–430.
- Bronk Ramsey, C. (2001) Development of the Radiocarbon Program OxCal. Radiocarbon, 43, 355–363.
- 中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の<sup>14</sup>C年代. 3–20.
- Reimer, P.J., Baillie, M.G.L., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Bertrand, C.J.H., Blackwell, P.G., Buck, C.E., Burr, G.S., Cutler, K.B., Damon, P.E., Edwards, R.L., Fairbanks, R.G., Friedrich, M., Guilderson, T.P., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kromer, B., McCormac, G., Manning, S., Bronk Ramsey, C., Reimer, R.W., Remmle,

S., Southon, J.R., Stuiver, M., Talamo, S., Taylor, F.W., van der Plicht, J. and Weyhenmeyer, C.E. (2004) IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26 cal kyr BP. Radiocarbon, 46, 1029-1058.



第38図 較正曲線と柱材のウイグルマッチング図



第39図 柱材のウイグルマッチングの確率分布図

## VII. まとめ

今次調査区は元袋遺跡とされている範囲の北辺部にある。遺構の密度は第3次調査より少なく、出土遺物も少なかった。以下、第1次調査や第3次調査の成果と対比しながら、時代を窓て説明したい。

**古墳時代** 住居跡などの集落に関する遺構は確認できなかつたが、P254が挙げられる。出土した甕は、ピットの中に横向きに置かれていたもしくは正置したものと判断され、人為的にピット内に置かれたものと考えられる。

**古代** SI242とSI245は出土遺物の様相から奈良時代頃の遺構と推定される。SI242の北辺にはカマドの左袖と燃焼部、貯藏穴と考えられるP1が残存していた。カマドが住居の北壁に付設された点は、元袋遺跡第1次調査や第3次調査で確認された傾向と一致する。

SI245からは底部穿孔された小形の土器が出土した。実用性には乏しいと考えられるが、具体的な用途は不明である。

SI242とSI245は、調査区の南東隅に位置しており、これらより北西では住居跡は確認できなかつた。東方約150mに位置する元袋遺跡第1次調査区では、奈良時代の堅穴住居跡が確認されているため、奈良時代の居住域の中心は、今次調査区より東に広がることが予想される。

平安時代の遺構としては、SK278が挙げられる。SD12などの他の遺構からも、平安時代中頃に位置づけられる遺物が出土している。古代の遺構は、大きく分けて奈良時代と平安時代中頃の2時期にわたると考えられ、第1次調査から3次調査までの成果と同様である。

**中世** SD28から出土した至大通賀が挙げられる。至大通賀の初鉄年は1310年なので、満の年代もこれを遡ることはないと推定できる。なお、他には中世の遺構・遺物は確認していない。

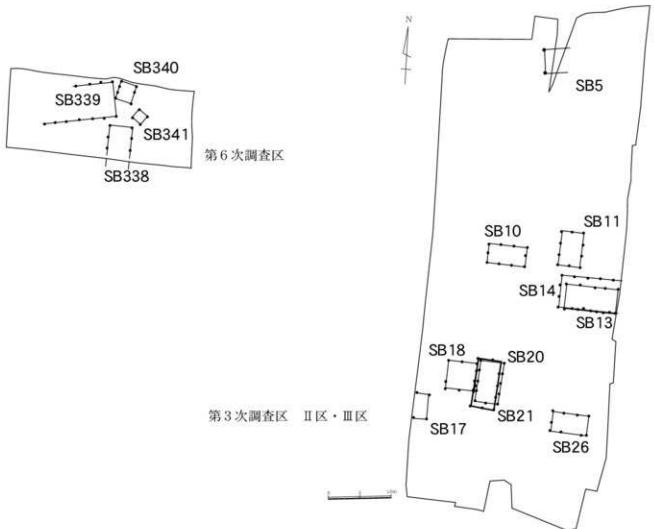
**近世** 挖立柱建物については、出土土器が小片であることや、柱穴に伴う遺物がないことなどから時期を特定することができなかつた。しかし、SB338についてP3から出土した柱根を分析したところ、18世紀中頃の可能性が高いとの結果が得られた。第3次調査で確認された近世の挖立柱建物群と比べると、同一方向もしくは直角方向に主軸をとり柱間が近似している建物がある(第40図)。これらの建物配置から同時代性を推定することができるが、科学的分析の結果もこれに合致する。なお、SB339についても第3次調査SB5と主軸方向が概ね一致することから近世と推測される。

元袋遺跡第3次調査では、I～IV期の4時期にわたる近世の屋敷跡が確認された。I・II期は17世紀を中心とした時期で、堀の存在や出土遺物から武家の屋敷跡と考えられている。II期の後半期である18世紀前半には屋敷の性格が変わり、18世紀後半以降のIII・IV期には農家の屋敷地となつたと考えられている。今回の調査で確認したSB338は、II期の後半期にあたり屋敷の性格の転換期にあたることとなる。

宮澤氏は「近世民家への地域的特色」のなかで、近世民家とそれ以前の住まいとの構造上の重要な相違点を礎石建の建物へ転換したこととしたうえで、「東北地方ではさらに遅く十七世紀末から十八世紀初頭頃に成立した」と述べている(宮澤智士1985)。建物構造からは造成と耕作土の影響で擾乱を受け、礎石がなくなつた可能性があるため、礎石建の建物が存在しなかつたとは断言できないが、今までの調査結果はそれに反して、挖立柱建物が造り続けられた例といえる。挖立柱建物が継続して造られたのは、第3次調査結果から考えられているように、農家の屋敷地に転換したことが関係していると推定できる。

本調査では、第3次調査結果から推定されている屋敷範囲から北西方向に外れた位置にある。一連のものか別の敷地のものかは不明であるが、江戸時代中頃には屋敷地が広がつていたと考えられる。

- (1)今回の調査では、縄文時代後期と考えられる土器と、古墳時代、古代や中世の遺構や遺物を検出した。
- (2)縄文土器は小片のみで、遺構は下層確認調査においても確認できなかった。
- (3)古墳時代の遺構は、ピット1基を確認した。
- (4)奈良時代の主な遺構としては、堅穴住居跡2軒が挙げられる。
- (5)平安時代の土坑を確認した。出土遺物から9～10世紀前半頃と考えられる。
- (6)中世と確定できる遺構はないが、SD28から至大通賀が出土した。SD28は中世に属する可能性がある。
- (7)掘立柱建物は、柱根の科学分析結果によると、江戸時代中頃の可能性が高い。



第40図 元袋遺跡第3次・第6次調査 掘立柱建物配置図  
\*『元袋遺跡』より抜粋・加重

## 参考文献

- ・氏家和典 1957 「東北土師器の形式分類とその編年」『歴史』第14輯 東北史学会
- ・岡田茂弘・桑原滋郎 1975 「多賀城周辺における古代杯形土器の変遷」『研究紀要Ⅰ』宮城県多賀城跡研究所
- ・佐藤敏幸 2007 「v. 宮城県北部・沿岸部」『古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』  
平成15年～平成18年度科学研究費補助金(基礎研究B)研究成果報告書 東北学院大学文学部
- ・滋賀県文化財保護協会 1988 『宇曾川災害復旧事業に伴う肥田城跡発掘調査報告書』
- ・白鳥良一 1980 「多賀城出土土器の変遷」『研究紀要Ⅵ』宮城県多賀城跡研究所
- ・仙台市教育委員会 1982 『栗遺跡』仙台市文化財調査報告書第43集
- ・仙台市教育委員会 1987 『元袋Ⅲ遺跡』仙台市文化財調査報告書第103集
- ・仙台市教育委員会 1994 『元袋遺跡－第2次発掘調査報告書－』仙台市文化財調査報告書第188集
- ・仙台市教育委員会 2000 『大野田古墳群・王ノ墳遺跡・六反田遺跡』  
富沢駅周辺区画整理事業関係遺跡発掘調査報告書Ⅰ 仙台市文化財調査報告書第243集
- ・仙台市教育委員会 2004 『元袋遺跡－都市計画道路「川内・柳生線」関連遺跡－発掘調査報告書Ⅱ』仙台市文化財調査報告書第272集
- ・仙台市教育委員会 2005 『仙台の遺跡』仙台市教育委員会
- ・仙台市教育委員会 2005 『郡山遺跡発掘調査報告書』総括編1 仙台市文化財調査報告書第283集
- ・仙台市編さん委員会 1995 『仙台市史 特別編2 考古資料』仙台市
- ・藤沼邦彦・神宮寺千恵 1992 「宮城県における一括出土の渡来鏡－女川町御前浜出土の古鏡を中心にして」  
『東北歴史資料館 研究紀要』第18巻 東北歴史資料館
- ・村田晃一 2007 「v. 宮城県中部から南部」『古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』  
平成15年～平成18年度科学研究費補助金(基礎研究B)研究成果報告書 東北学院大学文学部
- ・宮澤智士 1985 「近世民家の地域的特色」『講座 日本技術の社会史 第7巻 建築』日本評論社

# 写 真 図 版



1 調査区周辺空中写真（昭和31年撮影）

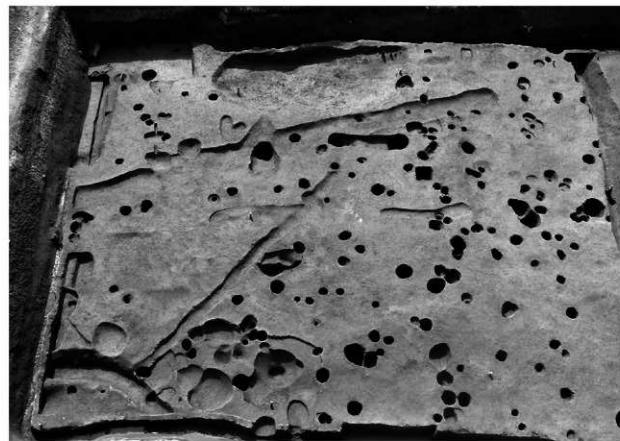


2 調査区周辺空中写真（平成18年撮影）

写真図版 1 空中写真



3 調査区V層上面 全景（東から）



4 調査区V層上面 東部～中央（北から）

写真図版2 調査区完掘状況



5 P254 遺物出土状況（北から）



6 P254 完掘状況（北から）  
写真図版 3 P254ピット



7 SI242 全景(南から)



8 SI242 遺物出土状況(南から)



9 SI242カマド 掘出状況(南から)



10 SI242 土層断面(北西から)



11 SI242-P1 土層断面(西から)

写真図版4 SI242竪穴住居跡



12 SI245 完掘状況（東から）



13 SI245掘り方 全景（南から）



14 SI245 土層断面（西から）

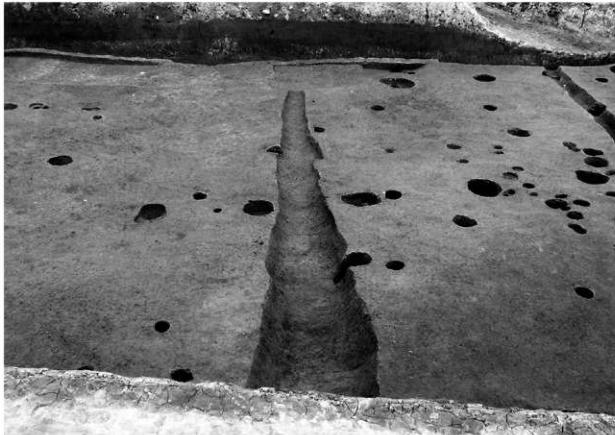


15 SI245 土層断面（北から）



16 SI245-P1 遺物出土状況（南から）

写真図版5 SI245竪穴住居跡



17 SD206 完掘状況（南から）



19 SD 2 + SD28 完掘状況（南西から）



18 SD246 完掘状況（北から）

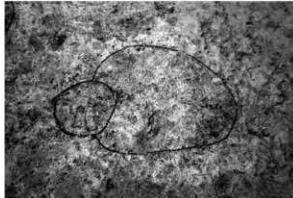


20 SD12 完掘状況（東から）

写真図版 6 溝跡



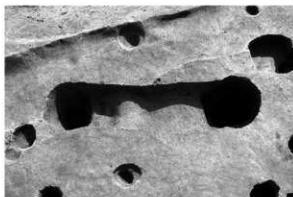
21 SK13 遺物出土状況（東から）



22 P16 · SX17 検出状況（南から）



23 SK82 完掘状況（東から）



24 SK83 · SK89 完掘状況（北から）



25 SK231 完掘状況（北から）



26 SK240 完掘状況（東から）



27 SK278 完掘状況（東から）



28 SK289 完掘状況（西から）

写真図版 7 土坑



29 P279 遺物出土状況（南から）



30 SK291 土層断面（南から）



31 SB338 完掘状況（東から）



32 SB338-P6 柱根 出土状況（東から）



33 SB338-P5 柱根 出土状況（東から）

写真図版 8 SB338 据立柱建物跡・土坑・ビット

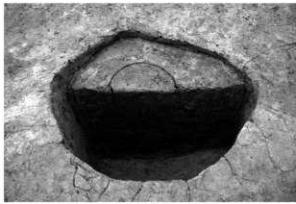


34 SB339 南側柱穴列 完掘状況（北から）



35 SB339 北側柱穴列 完掘状況（北から）

写真図版 9 SB339 堀立柱建物跡



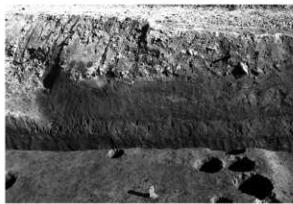
36 SB339-P4 土層断面（北から）



37 SB339-P9 土層断面（南から）



38 7グリッド北部遺構 完成状況（南から）



39 調査区北壁（南から）



40 調査区東壁（西から）



41 下層確認1トレンチ 全景（南から）



42 下層確認2トレンチ 全景（南から）

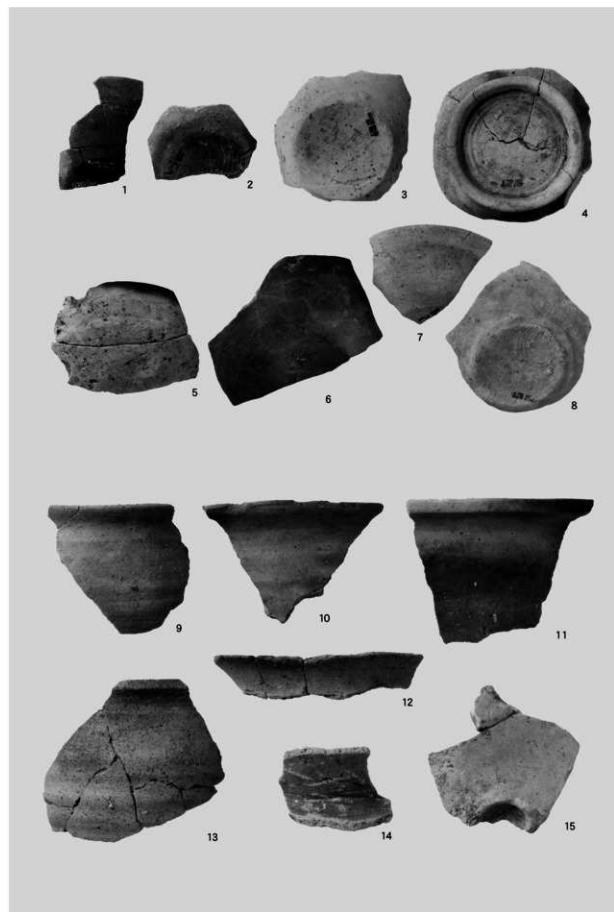


43 下層確認3トレンチ 全景（北から）

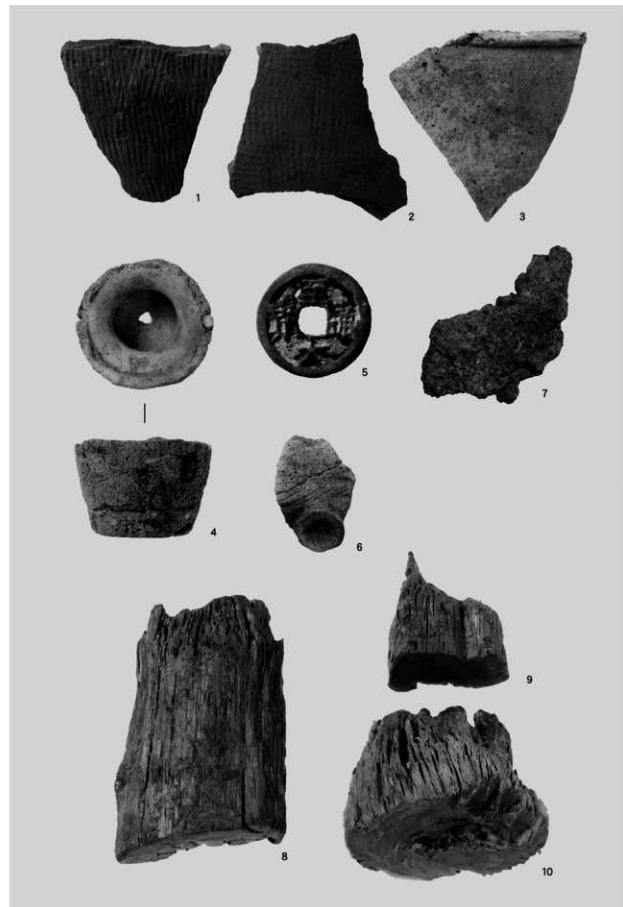
写真図版10 基本土層・下層確認トレンチ等



写真図版11 出土遺物 1



写真図版12 出土遺物 2



写真図版13 出土遺物 3

## 報告書抄録

ふりがな	もとぶくろいせき だいろくじはっくつちょうさほうこくしょ							
書名	元袋遺跡							
副書名	第6次発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	仙台市文化財調査報告							
シリーズ番号	第341集							
編著者名	平間亮輔、服部英世、伊藤真史							
編集機関	仙台市教育委員会(文化財課)							
所在地	〒980-8671 仙台市青葉区国分町三丁目7番1号 TEL 022-214-8894							
発行年月日	平成21年3月19日							

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因		
		市町村	遺跡番号							
元袋遺跡	仙台市太白区 大野田字 元袋17	04100	01179	38° 13' 52" 8"	140° 38"	2008.08.18 ~ 2008.10.16	340m <sup>2</sup>	共同住宅建設に 伴う事前調査		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項			
元袋遺跡	集落跡	古墳時代	ピット		土師器					
		奈良時代	竪穴住居跡		土師器・須恵器					
		平安時代	ピット・土坑・溝跡		土師器・須恵器					
		中世・近世	掘立柱建物・溝跡		銅鏡・陶器					

---

仙台市文化財報告書第341集

**元袋遺跡**

-第6次発掘調査報告書-

2009年3月

発行 仙台市教育委員会

仙台市青葉区国分町3丁目7番1号

仙台市教育委員会 文化財課

TEL 022-214-8894

印刷 富士出版印刷株式会社

---